

矢津昌永の地理学

— 書誌学的調査 1 —

Masanaga Yazu's Geographical Works,

— A Bibliographic Survey 1 —

源 昌 久

Shokyu Minamoto

序

第Ⅰ章 著作目録

第Ⅱ章 研究文献目録

第Ⅲ章 書誌的注解

第Ⅳ章 矢津昌永の生涯

序

これ迄の明治地理学史の研究は帝国大学を中心とするアカデミズム地理学の形成に専ら関心が向けられてきたといつてよい。最近、志賀重昂、内村鑑三を地理学者として再評価する試みがいくつか現われたことは、このような地理学史研究の欠陥を是正しようとするものである。

筆者が先に発表した、志賀¹⁾、内村²⁾の地理学に関する業績の書誌学的研究はこのような最近の明治地理学史研究の気運を助長するためのひとつの素材提供の試みであった。

今回はわが国に於るアカデミズム地理学確立以前に地理学教育に一生を捧げた矢津昌永を取りあげて、彼の著作目録、研究文献目録を作成することによって、これ迄空白であった明治地理学形成の前史に対してひとつの研究素材を提供することとしたい。

なお、この小論では矢津の生涯について筆者がこれ迄調査した史料に基づいて彼の略伝のために一章を設けた。その理由は矢津については志賀、内村の場合と異なり、これ迄地理学界に於て殆んど黙殺されていたため、その生涯について信頼すべき文献が皆無であると考えられた為である。

今回の研究は矢津の地理学に関する研究のための基礎的作業であり、彼の地理学の体系、時代とのかかわり、さらに明治地理学史上に於る彼の位置の確立等についての研究発表は後日に期したい。

第Ⅰ章 著作目録

ここに掲載した矢津の著作は次の規則に従って目録に作成された。

A. 収録の範囲

1. 期間

明治22年から昭和53年7月迄に発行されたものに限った。

2. 対象とした資料

矢津が執筆ないし共著作した単行書および論文とした。単行書は (a) 総記, (b) 日本地理, (c) 世界地理, (d) 地図に分類し, できる限り初版本にあたり, 異版(本)も可能な範囲で記載した。論文は原則として地理学関係誌より採録した。

B. 記載方法

単行書は上記の分類の内で刊行年順に排列して記載し, 論文は分類せず発表順に記載した。また, 第Ⅲ章 書誌的注解にとり上げてあるものには書名あるいは論文の標題のあとに『□』を付した。

1. 単行書の記述

(1) 記載の順序は書名, 肩書および著者名 (『矢津昌永』著以外の時のみ記入), 発行所 (東京以外は地名付記), 発行年月日, 判型, 頁数 (序, 目次, 本文等に分けて記入), 定価, 叢書注記, 所蔵注記の順に記入した。

構成は次の通りである。

文献番号 書名 肩書および著者名

発行地 発行所 発行年月日(版表示) 判型

頁数

定価 (叢書名) 〈所蔵機関名〉

(『文献番号』は以下『㊥』と略す。)

(2) 書名の決定は標題紙, 奥付を参考にして決定した。

(3) 刊年を決定する際, 初版本にあたるができなかった場合には筆者があたることのできた再版以後の図書の版の刊年を参考にした。

(4) 頁数の記入の方法はノンブルのある場合はそれに従い, 第何頁 (『丁』) から第何頁 (『丁』) を示す。序文等にノンブルのない場合はその総ページ数を記した。なお, 数字は原本に使われているものを採用した。

(5) 『(奥付裏) 広告』は筆者が必要と思われた場合のみ記載した。

(6) 1部2冊以上の図書は一括して記載し, また, 外国編, 関連する地図帳等も一括して『日本地理』の部へ排列した。但し, 叢書は別々に排列した。

(7) 地理学一般をあつかっている図書(概説書, 通論)は『日本地理』の部へ分類して, 排列した。

(8) 定価は奥付, 広告, 目録等で判明したもののみを記入した。

(9) 所蔵機関名の略称は直接採録を行った機関に限って記入し, 次のように略記した。
早稲田大学図書館は<早大図>, 国立国会図書館は<国会図>, 一橋大学附属図書館は<一橋図>, 慶應義塾図書館は<慶図>。

2. 論文の記述

論文は書誌的事項を次のように記入した。

標題, 肩書および筆者名(『矢津昌永〔著〕』以外の時のみ記入), 誌名, 巻号, 発行年月日, 記載頁。

構成は次の通りである。

㊤ 標題 肩書および筆者名

「誌名」 巻号 発行年月日 記載頁

なお, 頁付けの数字はアラビア数字に統一した。

3. その他

(1) 使用漢字, かな文字は著作目録, 注, 備考, 内容等の引用文のところでは原本に従い, 略字等は使用しなかった。

(2) [] 記号は筆者が必要と思われる語, 数字を追加した場合に使用した。

() 記号は説明その他がある場合に使用した。

『 』記号は筆者が注意しなければならないと思われる語について使用した。

(3) 序, 緒言等で内容を知るために, 重要と思われた書物については(備考)の項に記した。また, 目次については(内容)の項に記した。

(A) 単行書の部

(a) 総記(索引)

1 地名索引 内外地誌 日本之部[□]

早稲田大学出版部 明治四十一年六月廿八日発行 菊判

内外地誌発行の要旨一〜四 目次一〜十二 [本文(表共)]一〜五九六 日本地名索引一〜四六 日本地名索引1〜73

定価金貳圓五拾錢 <早大図>

(備考) 発行の要旨

(前略) 本書は, もと地誌上の詳細なる研究を試みんとするもの, 若くは文部省の教員検定に應ぜんとする者の通誦用に供せんと目的を以て, 地學の泰斗矢津, 野口兩教授に起稿を懇請し, 日本と外國との二部に分ちて, 最近の歴史地理科講義に掲げしものなり。

(後略) (P. 2)

(内容) 目次

緒論

自然地理

位置 幅員 地形 地體の構造 地史 火山 水系 氣候 日本の海流

人文地理

日本人 人口 人情 風俗 宗教 教育 衛生 國家 國體 皇室 政體 憲法 立法
制 政黨 行政制 司法制 國防 軍政 海軍 經濟 交通 殖産 外交貿易

地方誌

〔府県別名〕 臺灣 樺太南部 遼東半島 地方廳管轄一覽表

(b) 日本地理

2 日本地文學^口 理學博士 小藤文次郎校閲 矢津昌永編述^{注1}丸善商社^{注2} 明治二十二年五月三十日訂正再版出版^{注3} 四六判序〔小藤文次郎識〕一〜七 日本地文學自序一〜七 日本地文學小引一〜三 日本地文學目次
一〜七 〔口絵〕〔1枚〕^{注4} 〔本文(図共)〕一〜四百七十五丁^{注5}

定價金壹圓五拾錢 <国会図>

注1：刊行当時の矢津の住所は、奥付によると、『福井縣福井佐佳枝中町百廿一番地寄留』。

(日本地理に分類される図書で住所表示が必要と思われるもののみ以下記載する。)

注2：この表示は標題紙による。奥付の表示は『丸善商社書店』。

注3：初版の出版年は本書の奥付によると、『明治二十二年三月六日出版』。

注4：本文に入る前の図、写真、絵等は書誌の事項として別箇に記載する。以下同様。

注5：『丁』を『頁』と同義に使用。

(備考) 日本地文學自序

地學ノ語タルヤ其區域極メテ廣漠タリ而メ此語ノ適用ヲ今日通俗流用ノ區域内ニ限定スル
 片ハ唯々地名及ヒ地理ニ關スル統計ヲ學習スルニ止マリ學者ヲシテ學習上地學ノ頗ル快樂ニシ
 テ有益ナルノ眞味ヲ解セシムルヲ得ズ是レ豈ニ地學教育ノ趣旨ナランヤ願フニ最初斯學ニ依リ
 テ初學ヲ薰陶スルニアラザレバ教育上尋常ノ基礎ヲ置カザルノミナラズ初學ヲシテ理學的思想
 ヲ生セシメ難キモノナリ (中略) 雖然書中引用^{注6}ノ廣キト事實ノ精確ナルベキトハ余ノ聊カ自
 ラ誇ル所也余ノ曩ニ福井縣中學ノ命ヲ帶ビテ中央氣象臺、地質局、水路部等ニ就キ事實ノ調査
 ヲ請フヤ各局部ハ大ニ調査ノ便宜ヲ與ヘラレ余ノ疑ヲ闕キシ (後略) (P.1〜2, P.4〜5)

注6：ここでいう『引用』とは説明のために事例(例証)をあげる意味であろう。なお、辻
 田は次のような見解を述べている。「昌永のいう引用の広さとは、おそらく広い視野から材料
 をえらんだというほどの意味であろう。」³⁾

日本地文學小引

一 此書ハ本ト中等學校教科用書ヲ目的トシテ編纂セリト雖モ編者ノ希望ハ獨リ學校教科用書ニ止マラズ又聊カ實業家ノ事業ニ一臂ノカラ添ヘント欲スルモノナリ (後略) (P. 1)

(内容) 日本地文學目次^{注7}

第一編 総論

緒言 地球ノ形狀及ヒ其運動 經線及ヒ緯線 日本ノ位置

第二編 氣界

空氣 空氣ノ壓力 空氣ノ温度 空氣ノ濕度 空氣ノ運動 天氣

第三編 陸界

日本ノ地史 海岸線 陸地ノ水 山岳 谿谷 平原 日本火山附磐梯山ノ爆裂 地震
土地ノ變動 鑛泉 日本鑛力

第四編 水界

海洋 海水ノ組織 海水ノ温度 海深 海水ノ運動 日本海流 海流ト氣候及ヒ其他ノ
關係

第五編 氣候

日本氣候ト各國トノ氣候 日本各地ノ氣候 霜雪終始ノ期節 日本氣候ト外客 氣候ト
農耕トノ關係 日本植物帶 高低ト植物帶ノ關係

注7：各章の見出しに関しては、タイトル名のみを列举する。

2-A 日本地文學^{注1} 理學博士 小藤文次郎校閲 矢津昌永編述

丸善商社^{注2} 明治二十四年二月一日三版印刷及出版 四六判

序〔小藤文次郎識〕一〜七 日本地文學自序一〜七 日本地文學小引一〜三 日本地文學目次
一〜七 〔口絵〕〔1枚〕〔本文(図共)〕一〜四百七十五丁

定價金壹圓五拾錢^{注3} <一橋図>

注1：本書の表の見返り（遊びの側）に『文部省検定済^{中學校教科用書}_{師範學校教科用書}』の朱印あり。

注2：㊦2の注2と同様。

注3：この表示は奥付による。本書の見返り（遊びの側）に記入(手書)されている事項は次の通りである。（図書館購入日、価格であろう。）

(日付) 明治二十四年十月七日

(価格) 壹圓二十錢

2-B 日本地文圖^{注1}

丸善商社書店 明治二十五年十一月七日印刷及出版 29cm×24cm

日本地文圖目次並圖解〔4頁〕 日本地文圖例言〔1頁〕 〔地図・図〕〔30枚〕 〔奥付裏広告
(日本地文學批評)〕〔3頁〕

<国会図>

注1：刊行当時の矢津の住所は、奥付によると、『熊本縣熊本市東外坪井町百三十六番地』。

(備考) 例言

(前略)

一 本圖ハ概子日本地文學ノ挿圖ヲ採蒐シタルモノナルヲ以テ各地圖ノ詳細ナル説明ハ皆ナ日本地文學ニ譲ル

(中略)

一 地理ヲ學習スルニ地圖ト聯關感念ヲ要スルコト固ヨリナレバ學者ハ只ニ地圖ヲ繙閱スルノミナラズ併セテ此圖ニ示ス各種ノ現象ヲ描寫習練センコト特ニ余ノ勸告スル所ナリ

明治二十五年八月廿五日東京駿臺ニテ

矢津昌永識

3 日本帝國政治地理^口 矢津昌永編述^{注1}

丸善商社^{注2} 明治二十六年七月一日發行 菊判

日本帝國政治地理自序〔7頁〕 日本帝國政治地理例言一～二 日本帝國政治地理目次一～六（この内、挿入地圖及圖書目次五～六）〔本文(表, 地図共)〕一～四百五十〔廣告(日本地文學批評)〕一～八〔正誤表〕〔1頁〕

〔壹圓二十錢〇厘〕^{注3} <一橋図>

注1：刊行当時の矢津の住所は、奥付によると、『熊本縣熊本市東外坪井町百三十六番地』。

注2：⊗2の注2と同様。

注3：この表示は見返り(遊びの側)に記入(手書)されているもの。なお、日付は『明治二十六年十一月十三日』。

(備考) 日本帝國政治地理例言

一 本書ハ中等教育ニ於ケル教科用書ノミナラズ又廣ク社會一般ノ需用ニ應ゼンコトヲ期ス是レ我帝國國民タル者ノ總テ悉知セザルベカラザル事實ナリト信ズレバナリ

一 本書ノ引用書ハ自ラ種々ノ書類ニ亘リシト雖氏別ニ爰ニ掲グベキ程ノモノハナシ只帝國統計年鑑・「ステーツマンズ、イヤブック」及官報、諸新聞雜誌等ハ頗ル參考ノ料トナレリ

一 書中挿ム所ノ各種ノ地圖ハ概子余ガ創意ニ係リ實ニ意外ノ時日ト苦心トヲ要セシモノナリ特ニ人口配布圖ノ如キ府縣別又ハ國別ヲ採用セズシテ自然ノ配布ヲ現ハサンガ爲メニハ大ニ精魂ヲ費セリ・看者希クハ各地圖ヲ利用スルコトニ注意セヨ (後略) (P. 1)

(内容) 日本帝國政治地理目次^{注4}

第一編 總論

緒言 亞細亞ノ大勢 邦國ノ位置 國土ノ幅員 沿革<sup>附屬地ノ發達
東夷ノ地理トノ關係</sup>

第二編 社會住民

社會ノ組織 人種ノ説及種族制 人口附都邑ノ發達 人情 風俗 國語 教育 宗教

第三編 國家及政治

國家 國體及政體 憲法附地震火山ト立憲制度トノ説 立法制附第一期總選舉 行政制 司法制 國防軍制

第四編 財政及自治制

租税及國家ノ經營 國債及貨幣 富ノ配布 地方自治制 市及町村 郡及府縣

第五編 交通運輸

交通及其來歴 道路及車 鐵道 郵便 電信及電話 通信ノ地方的配布 海運

第六編 生業物産

國土ト生業物産トノ關係 農業及農産物 (一) 土地 (二) 農業者 (三) 地産物 (四) 蠶業 (五) 畜産 林制及林産 工業及美術 商業附街ノ盛衰 漁業及水産 鑛業及鑛産

第七編 外交貿易

外交上日本ノ位地 外交 貿易 貿易主場ノ變遷 日本ノ西比利亞鐵道ニ對スル港挿入地圖及圖書目次 (細目略)

注4：㊦2の注7と同様。

3-A 日本帝國政治地理 訂正再版 矢津昌永編述

丸善株式会社^{注1} 明治二十六年十二月十八日訂正再版發行 菊判

日本帝國政治地理自序〔7頁〕 日本帝國政治地理例言一～二 日本帝國政治地理再版に就きて一～二 日本帝國政治地理目次一～六(この内、挿入地圖及圖書目次五～六)〔本文(表・地図共)〕一～四百五十〔広告(日本帝國政治地理批評・日本地文學批評)〕一～五十一・一～八

<慶大図>

注1：この表示は標題紙による。奥付の表示は『丸善株式會社書店』。

(備考) 日本帝國政治地理再版に就きて

(前略) 將に第二版を剗刷すへきをを報せり。因りて江湖の批評中。其適當なる趣旨。反忠告を參酌し。傍ら初版の設謬等。凡そ二百三十有餘箇所を訂正し。茲に再版に附するに臨み。本書に關し。批評若くは忠告を辱ふしたる。江湖諸彦に鳴謝すと云爾。

明治二十六年十月三十日

著者識 (P. 2)

4 中學日本地誌^{口注1}

丸善株式會社^{注2} 明治二十八年三月十四日發行 四六判

中學日本地誌序言一～六 注意一～四 中學日本地誌目次一～六〔本文(地圖共)〕一～二百七十

七

定價金六拾五錢 <国会図>

注1：刊行当時の矢津の住所は、奥付によると、『東京市麴町區有楽町三丁目一番地』。

注2：㊦3-Aの注1と同様。

(備考) 中日本地誌序言

本書ヲ著スニ読リ著者ガ特ニ意ヲ用井タル諸點ヲ擧グレバ、第一愛國心ノ涵養・第二生産物ノ配布及其發達・第三美術思想ノ獎勵・第四風土及土俗ノ異同是ナリ以上四點ハ中等地誌トシテ著者ノ最モ緊要ト認メタル所ナリ (後略) (P. 1)

注意

一 本書ハ余カ從來尋常中學及師範、高等中學及師範等ノ諸學校ニ於テ教授セン經驗ニ據リ最モ中等教育初歩ニ適切ナリト思考スル事項及順序ニ據リテ編纂セル尋常中學校尋常師範學校及之ニ準スル學校ノ教科書ナリ (後略) (P. 1)

(内容) 中日本地誌目次

中學地誌總論

方位 經線・緯線 面積 地心熱 水成岩・火成岩・冲積層 陸ノ名稱 山岳・分水嶺 河系 時候⁷(同溫線, 雨量, 海流) 地圖描法

日本地誌

位置 形勢 幅員 區畫 人口 地形 地軀構造・火山 主要ノ山脉(樺太山系, 支那山系, 富士帶) 水理 平原 湖沼 海岸線(良港) 風景 地震・鑛泉 氣候(風位, 海流, 雨量) 生業產物(林產, 工業, 水產, 鑛產) 國體及政體(立法, 行政, 司法) 國防(陸軍, 海軍) 種族(人情, 風俗, 教育, 宗教) 交通運輸(鐵道, 郵便, 電信電話, 海運) 外交(公使, 領事) 貿易(重要輸出入品, 貿易國) 政治的區畫 氣候沿革

地方誌

幾内誌 東海道誌附豆南諸島 東山道誌 北陸道誌 山陰道誌 山陽道誌 南海道誌 西海道誌附琉球群島 北海道誌

4-A 中日本地誌

丸善株式會社^{註1} 明治二十八年四月廿三日再版訂正發行 四六判

中日本地誌序言一〜六 注意一〜四 中日本地誌目次一〜六 [本文(地圖共)]一〜二百七十七

定價金六拾五錢 <国会図>

注1：㊦3-Aの注1と同様。

4-B 中日本地誌

丸善株式會社^{註1} 明治二十九年三月十日増補訂正三版發行 四六判

中日本地誌序言一～六 注意一～四^{注2} 中日本地誌目次一～六 [本文(地図共)]一～三百二
 定價金六拾五錢 <国会図>

注1：㊦3-Aの注1と同様。

注2：『注意』の内容に関して、本版は初(再)版に比較して多少増加する。(㊦4-B, 4-C, 4-Dは同一。)

4-C 中日本地誌

丸善株式會社^{注1} 明治二十九年十一月八日訂正八版發行 四六判

中日本地誌序言一～六 注意一～四 中日本地誌目次一～六 [本文(地図共)]一～三百二
 定價金六十五錢 <国会図>

注1：㊦3-Aの注1と同様。

4-D 中日本地誌^口

丸善株式會社^{注1} 明治二十九年十二月十日訂正九版發行 四六判

中日本地誌序言一～六 注意一～四 中日本地誌目次一～六 [本文(地図共)]一～三百二
 定價金六十五錢 <国会図>

注1：㊦3-Aの注1と同様。

5 新日本地誌^{口 注1}

丸善株式會社^{注2} 明治二十八年十二月三日發行 四六判

詔勅一～六 媾和條約一～十四 [本文(地図共)]一～四十六

定價金貳拾五錢 <国会図>

注1：刊行当時の矢津の住所は、奥付によると、『東京市小石川區西江戸川町九番地』。

注2：㊦3-Aの注1と同様。

6 中地文學

丸善株式會社^{注1} 明治三十年十一月十日發行 四六判

[世界博覽会に於ける「日本地文学」に対する賞牌賞状の写真][1枚] [写真の説明][1頁]

中地文学序言一～二 中地文學目次一～六 [本文(図共)]一～二百五十四
 <国会図>

注1：㊦3-Aの注1と同様。

(備考) 中地文學序言

本書ノ綱目及其順序ハ大抵高等師範學校ニ於テ議定セン尋常中學校地文學科教授要目ニ據
 リテ之ヲ編セリ然レモ高等師範學校附屬尋常中學校ニ於テ實地教授ノ上不適當ト認メタル節ハ

多少之ヲ變更セシ所ナキニアラズ 本書中ノ論説及解畫圖等ニ就テハ學友諸氏及斯道學者ノ批評校正ヲ乞ヘリ然レモ尙ホ是正ノ點アラバ江湖博識ノ教示ヲ待タントス

明治三十年十月秋色満天之候

著者識 (P. 1 ~ 2)

(内容) 中學地文學目次

(1) 地文總論 (2) 太陽系 (3) 太陽 (4) 太陰 (5) 日蝕月蝕 (6) 地球ノ形體及其大サ (7) 地球ノ運動 自輔・公転 (8) 晝夜及四季 (9) 曆 (10) 地球上ノ想像線 緯線・經線・時ト經度トノ關係・標準時 (11) 大氣 (12) 氣層ノ高度 (13) 大氣ノ壓力 (14) 大氣ノ溫度 日本ノ同溫線 (15) 大氣ノ濕度 露・霜・霧・霞・暈・雲・雨・雨量ノ配布・雪・霰・雹 (16) 大氣ノ運動 世界風ノ大體・海風及陸風・地方風・大風・日本ノ大風 (17) 陸界地球ノ發育・始原界・太古界・中古界・噴出岩花崗岩・火山岩 (18) 地皮ノ構造 地球ノ比重 (19) 陸地 陸地ノ配布・海岸線・陸地ノ凸凹・原野・谿谷 (20) 山岳 褶曲山脈・火山脈 (21) 島嶼 陸島・洋島 (22) 鑛泉 溫泉・冷泉・間歇泉・日本鑛泉ノ分布 (23) 火山 火山ノ配布・日本ノ火山 (24) 地震 海嘯 (25) 内地水 泉・河流・湖 (26) 水界 大海盤 (27) 海水 海水ノ鹽分・海水ノ比重・海水ノ溫度 (28) 海底ノ狀態 海洋ノ深度 (29) 海水ノ運動 波浪・洋流・潮汐 (30) 冰山 (31) 海洋ノ水分

6-A 中學地文學

丸善株式會社^{註1} 明治三十一年四月一日増補訂正再版發行 四六判

〔世界博覽會に於ける「日本地文学」に対する賞牌賞状の写真〕〔1枚〕〔写真の説明〕〔1頁〕

中學地文學序言一〜二 増訂序言〔1頁〕 地文學目次一〜六 〔本文(図共)〕一〜二百五十四

定價金八拾五錢 <国会図>

注1：⊗3-Aの注1と同様。

(備考) 増訂序言

中學地文學發刊以來江湖同好ノ愛讀ニヨリ初版既ニ盡キテ茲ニ再版ニ附スルニ際シ小川琢治氏ノ懇切ナル批評并ニ角田政治氏ノ詳密ナル校合其他知友諸彦ノ懇篤ナル助言等ニヨリテ初版ニ於ケル誤謬ヲ正シ或ハ筆意ノ到達セザリシ廉ヲ増補シタルモノ凡四十餘箇所アリ以テ聊カ世ノ愛讀ニ對ントス今其由ヲ記シテ第二版ノ序言ニ代フト云爾

明治三十一年三月下澣

高等師範學校ニ於テ

著者識

7 新編中學地理 日本誌 矢津昌永監修 角田政治編修

集英堂 明治三十一年四月八日發行 菊判

凡例一～三 新編中學地理日本誌目次一～四 大日本帝國及附近之圖〔1枚〕〔本文(地図共)〕
一～二百五十三

定價金七拾五錢 <国会図>

(備考) 凡例

一 本書ハ尋常中學校、尋常師範學校其ノ他總ベテ中等教育ノ地理教科用ニ充ツル目的ヲ以テ編修セリ

一 本書ヲ大別シテ、自然地理、地方誌、人文地理ノ三編トナス、最初自然地理ニヨリテ、日本帝國自然上ノ概念ヲ與エ、進ミテ地方誌ニ至リ、全國各部ニ於ケル天然及人事上、事項ヲ分解説明シ、終リニ人文地理ヲ以テ日本全國テフ概括ノ觀念ヲ與フルノ趣向ナリ

一 本書ニ用ニル日本ノ區劃ハ從來ノ幾道區劃ニ據ラズシテ、帝國統計年鑑ニ定ムル所ノ區劃法ヲ採レリ、是レ幾道區劃ナルモノハ單ニ地理上ノ一名目トシテ存スルノミニシテ、人事上既ニ何ノ關係ヲモ有セズ、然ルニ統計年鑑ノ區劃法ハ較々我ガ國風土の事情ニ適エルモノニシテ地勢、水系、交通等ノ聯絡關係ヲ知り易カラシムレバナリ

一 各地方誌ノ終ニ於テ風土比較ヲ示セリ、是レ己ニ學ベル地理上ノ事項ヲ彼レ是レ相對比シテ、一層精確ナラシメンガ爲メナリ、但其ノ一端ヲ擧ゲタレバ教授ノ際宜シク敷衍添加アラシコトヲ望ム。(後略) (P. 1～2)

(内容) 新編中學地理日本誌目次

第一編 自然地理

(細目略)

第二編 地方誌

本州中區誌 本州北區誌 本州西區誌 四國區誌 九州區誌 附沖繩誌 北海道區誌 臺灣區誌

第三編 人文地理

(細目略)

挿入地圖 (細目略)

7-A 新編中學地理 外国誌 上巻□ 矢津昌永監修 角田政治編修

集英堂 明治三十二年二月廿七日發行 菊判

凡例一～二 新編中學地理外國誌上巻目次一～二 世界圖〔1枚〕〔本文(地図共)〕 一～百四十四

定價金六拾錢 <国会図>

(同上) 下巻

集英堂 明治三十二年二月廿七日發行 菊判

新編中學地理外國誌下巻目次一〜四 [本文(地図共)]一〜百七十九

定價金六拾五錢 <国会図>

(備考) 新編中學地理外國誌 凡例

一 本書は新編中學日本地誌と共に、尋常中學校、師範學校、其他之に準すべき學校の地理教科用に供する目的を以て編纂せり。

一 本書編纂の主趣(別に趣意書に詳述せり)は、日本誌と相待ちて、地理學上普通の智識を授け、思想の範圍を擴め、處世上の實益を収めしめんとを期せり。(後略) (P. 1)

(内容) 新編中學地理外國誌上巻目次

第一編 亞細亞洲誌

自然地理

第二編 亞細亞列國誌

(各国名)

第三編 人文地理

亞細亞洲ノ比較

第四編 大洋洲

(各国名)

(同上) 下巻目次

第一編 歐羅巴洲編

自然地理

第二編 歐羅巴列國誌

(各国名)

第三編 人文地理

歐羅巴洲比較

第一編 亞弗利加洲誌

自然地理

第二編 亞弗利加列國誌

(各国名)

第三編 人文地理

亞弗利加洲比較

第一編 北亞米利加洲誌

自然地理

第二編 北亞米利加列國誌

(各国名)

第三編 人文地理

北亞米利加洲比較

第一編 南亞米利加洲誌

自然地理

第二編 南亞米利加列國誌

(各国誌)

第三編 人文地理

南亞米利加洲比較

7—B 新編中學地理日本誌用地圖 矢津昌永監修 角田政治編集

集英堂 明治三十一年六月十一日發行

例言〔2頁〕 地図〔8枚〕

定價貳拾五錢 <国会図>

(備考) 例言

一 本圖ハ新編中學地理日本誌ノ附屬圖トシ且汎ク學生用若クハ旅行用ニ供センガ爲メ編纂セリ (後略)

8 中地文學

丸善株式會社^{註1} 明治三十二年二月十六日發行 四六判

中地文學序言一〜四 中地文學目次一〜五 [本文(図共)]一〜二六八

<国会図>

注1：⊗3—Aの注1と同様。

(備考) 中地文學 序言

中地文學ハ中地理學ニ續キ中等教育ニ於テ上級生ニ課スベキ書ナリ其體裁ハ總テ中地理學ヲ標準トシ既ニ我郷土及世界各國ノ地誌ヲ學ビシ者ニ向ソテ益々思想ノ範圍ヲ廣メシメ終ニ『地球』ト謂ヘル大問題ニ就キテ簡易ナル説明ヲ與ヘ以テ地理科ヲ綜合完結センモノナリ (後略) (P. 1)

(内容) 中地文學目次

第一編 總論

(細目略)

第二編 氣界

(細目略)

第三編 陸界

(細目略)

第四編 水界

(細目略)

第五編 生物界

(二四) 生物ノ分布 (二五) 生物ノ區界 (二六) 動植物ノ傳播 氣候・移轉及傳送・土地ノ
變遷及氣候ノ變化

8-A 中地文學

丸善株式會社^{注1} 明治三十二年十一月七日訂正再版發行 四六判

中地文學序言一〜四 [再版に就いて]四 中地文學目次一〜五 [本文(図共)] 一〜二六八
＜国会図＞

注1：⊗3-Aの注1と同様。

(備考) [再版に就いて]

明治三十二年六月再版ニ際シテ初版ノ誤脱數十個所ヲ訂正増補シタリ

明治三十二年南西風梅雨ヲ齎ラス時

矢津昌永又識

9 中地理學^{注1}

丸善株式會社^{注2} 明治三十二年三月二十六日發行 四六判

中地理學日本誌序言一〜四 中地理學日本誌目次一〜八 地方廳管轄表一〜十七 [本文(地
図共)]一〜二百八

＜国会図＞

注1：この表示は標題紙による。序言等では「中地理學日本誌」。以下⊗9-A, B, C, も
同様。

注2：⊗3-Aの注1と同様。以下⊗9-A〜Gまで同様。

(備考) 中地理學日本誌 序言

我國文運ノ進歩ハ戰後〔日清戰爭後〕特ニ著ルシク、萬般ノ事物ニ向ツテ須臾モ猶豫ヲ與
ヘザルニ至レリ。前著中學日本地誌ハ江湖ノ歡迎ニ頼リ、既ニ十數版ヲ重子、其既版毎ニ多少
ノ訂正ヲ加ヘタレドモ、最早訂正ノ能ク及バザル所アリ、且又其仕組ミニ於テモ、大ニ改正ヲ
要スル所アルヲ以テ、茲ニ本書ヲ編纂スルニ至レリ。本書モ亦前著ト同一ノ主義目的ヲ有セ
リ。(中略) 又今回特ニ注意セン點ハ、地理科ヲ以テ國民教科^〇ノ^〇助ト爲サントノ希望是ナ
リ。現今ノ中等教科ニ於テ、國民的智識ヲ養成スベキ學科ハ、日本地理ヲ以テ最モ其緣アリト
謂フベシ。故ニ立憲國民ノ智識ニ必要ナル、國政、自治制。兵役及納稅義務。租稅。歲出入。
參政權及外國人内地雜居等ノ意義ヲモ加ヘタリ、(後略) (P. 1〜2, P. 2〜3)

(内容) 中地理學日本誌目次^{注3}

第壹編

總論 地勢 氣候 住民 政治 生業物産 交通

第貳編 北日本

關東八洲 (一府, 六縣) 奥羽七州 (六縣) 中央高原 (三縣)

第三編 南日本

本州中部 (四縣) 北國 (三縣) 近畿 (二府三縣) 中國 (六縣)

第四編 四國 (四縣)

第五編 九州 (七縣附沖繩)

第六編 北海道 (十一國)

第七編 臺灣 (六縣, 三廳)

注3: 細目は略す。

9-A 中地理學[□]

丸善株式會社 明治三十二年十月十四日訂正再版發行 四六判

中地理學日本誌序言一〜四 中地理學日本誌目次一〜八 [本文(地図共)] 一〜二百八 地方廳管轄表一〜十七 陸軍配備表[1表]

<国会図>

9-B 中地理學[□]

丸善株式會社 明治三十三年十二月二十四日訂正八版發行 四六判

中地理學日本誌序言一〜四 [訂正版に就いて] 四 中地理學日本誌目次一〜八 [本文(地図共)] 一〜二百八 地方廳管轄表一〜十七 陸軍配備表[1表]

定價金六拾五錢 <国会図>

(備考) [訂正版に就いて]

開版以来江湖ノ歡迎ヲ受ケ茲ニ第八版ヲ發行スルノ運ニ膺リ最近ノ事實ヲ網羅センガ爲メ
一百數十個所ヲ増訂シ又稍組織ヲ改メ以テ進運ニ後レザランコトヲ期セリ

明治三十三年十一月 矢津昌永又識 (P. 4)

9-C ^{訂正}中地理學

丸善株式會社 明治三十四年四月十五日十版發行 四六判

中地理學日本誌序言一〜四 [訂正版に就いて] 四 中地理學日本誌目次一〜八 [本文(地図共)] 一〜二百八 地方廳管轄表一〜十七 陸軍配備表[1表]

定價金六拾五錢 <国会図>

9-D 中地理學^{□注1}

丸善株式會社 明治三十二年二月九日發行 四六判

中地理學外國誌序言一～三 中地理學外國誌目次一～六 [本文]一～四百十六

<国会図>

注1：この表示は標題紙による。序言等では「中地理學外國誌」。以下9-E, F, G も同様。

(備考) 中地理學外國誌 序言

中地理學外國誌ハ方今世界列國ノ進運ニ應ジテ其最近事實ヲ採リ本邦中等教育ノ教科用書ニ供スルノ目的ヲ以テ編述セリ 本書ノ主旨ハ世界地理ヲ學ブニ常ニ我帝國ヲ中心トシ基礎トシテ異邦ノ風土ヲ我國ト比較的ニ考究セシムベキ針路ニ導キ漸ク思想ノ範圍ヲ廣メ以テ長短取捨シ有無相通ジ遂ニ四海兄弟、萬國共通ノ意義ヲ明確ニ了解セシメントス (中略) (前著萬國地誌ハ教科用ニハ或ハ分量多カランモ本書教授者ノ參考書ニハ適當ナルベシ) (後略) (P. 1, P. 2)

(内容) 中地理學外國誌目次

亞細亞洲

總論 (各国名)

大洋洲

總論 (各国名)

歐羅巴洲

總論 (各国名)

亞弗利加洲

總論 (各国名)

北亞米利加洲

總論 (各国名)

南亞米利加洲

總論 (各国名)

9-E 中地理學[□]

丸善株式會社 明治三十二年四月十四日訂正再版發行 四六判

中地理學外國誌序言一～三 中地理學外國誌目次一～六 [本文]一～四百十六

<国会図>

9-F 中地理學

丸善株式會社 明治三十四年二月四日訂正九版發行 四六判

中地理學外國誌序言一～三 中地理學外國誌目次一～六 [本文]一～四百十六
定價金九拾五錢 <国会図>

9—G 中地理學

丸善株式會社 明治三十四年九月一日三訂十二版發行 四六判

中地理學外國誌序言一～三 中地理學外國誌目次一～六 [本文]一～四百十六
定價金九拾五錢 <国会図>

9—H 中地理學 日本誌用 日本地圖 完^{注1}

丸善株式會社書店 明治三十三年二月二十七日發行 菊判

中地理學
日本誌用 日本地圖序言〔2頁〕 中地理學
日本誌用 日本地圖目次〔2頁〕 [地圖]〔9枚〕

定價金貳拾錢 <国会図>

注1：書名は題簽による。

(備考) 中地理學
日本誌用 日本地圖序言

一 本圖ハ中地理學日本誌ヲ學習スル人ノ爲メ特ニ編纂セン圖ナレバ日本誌ニ記載セル地名ハ漏サズ悉ク記入シ其餘ノ註記ハ繁離ヲ避クルガ爲メ總テ省略セリ (後略)

(内容) 中地理學
日本誌用 日本地圖目次^{注2}

- (一) 日本全圖
- (二) 中部圖
- (三) 奥羽圖及新潟
- (四) 西部圖
- (五) 九州圖
- (六) 北海道圖
- (七) 臺灣圖
- (八) 東京市之圖
- (九) 京阪附近之圖

注2：細目は略す。

9—I 中地理學 外國誌用 外國地圖 完^{注1}

丸善株式會社書店 明治三十二年三月二十五日發行 菊判

中地理學
外國誌用 外國地圖例言〔2頁〕 [地圖]〔8枚〕

<国会図>

注1：書名は題簽による。

(備考) 中地理學
外國誌用 外國地圖例言

一 本圖ハ中地理學外國誌ヲ讀ム人ノ爲メ特ニ編纂セリ。而シテ其體裁ハ專ラ文部省指定ノ方針ニ拠レリ。(後略)

9-J 中地理學 外國誌用 外國地圖 全

丸善株式會社書店 明治三十二年十一月七日訂正再版發行 菊判

中地理學
外國誌用 外國地圖例言〔2頁〕〔地図〕〔9枚〕

定價金貳拾錢 <国会図>

10 日本政治地理^口

丸善株式會社 明治三十四年四月一日發行 菊判

日本政治地理自序一〜五 日本政治地理目次一〜六 大日本帝國地形圖〔1枚〕〔本文(表, 地図共)〕一〜三百六十八

正價金壹圓卅錢 <慶図>

(備考) 日本政治地理自序

回顧スレバ既ニ殆ト十年ニナリヌ。余ハ日本帝國政治地理ヲ著ハシテ世ニ質セシガ。其比類多カラサル書ナリシヲ以テ。版ヲ重ヌル數回ニ及ビ。尙續々需用アリシモ。該書ノ如キ國勢ヲ現ハスベキ書ノ舊版ハ。却テ讀者ヲ誤ルノ恐レアルヲ以テ。斷然絶版シタリ。爾來國運ノ隆興ト。社會ノ進歩トハ。我帝國ノ現狀及國勢ヲ知ラントスルノ望ハ。益々切ナルニ拘ラズ。之レニ關スル著述ハ今尙殆ト皆無ナリ。故ヲ以テ余ニ再ビ政治地理ノ編著ヲ促スコト頗ル急ナリ。是レ更ニ此著アル所以ナリ。(後略) (P. 1)

(内容) 日本政治地理目次

總論

第一編 國土

帝國の創建及沿革 國の位置 國の幅員

第二編 人民

社會 種族 族制 (人口 人口統計 人口沿革 男女比數 人口配布) 人情 風俗 宗教

教育 衛生 日本人の體格

第三編 邦制

國家 國體 (皇室) 政體 (憲法) 立法制 (參政權 政黨, 政派) 行政制 司法制 國防軍制 (陸軍, 海軍) 地方自治制 (市町村制 郡制 府縣)

第四編 經濟

財政 (納稅義務 租稅 歲出入 納稅額の配布) 國債 貨幣 富の配布 (所得稅額 富豪 貯蓄)

第五編 交通

交通の發達 道路及車 鐵道 郵便 電信電話 海運

第六編 生業及物産

農業及農産物 土地 農業者 農産物 食用農産物 工藝用農産物 牧畜 林業及林産 漁業及水産 鑛業及鑛産物 工業及工藝品 (織物 紡績 陶磁器 醸造 漆器其他 工業地) 商業

第七編 外交

各條約國との修交 貿易 輸出入額 輸出入品 貿易 (輸出入額 輸出入品 貿易國別 貿易港)

10—A 日本政治地理 (再版)

九善株式會社 明治三十四年九月廿一日再版發行 菊判

日本政治地理自序一～五 日本政治地理目次一～六 大日本帝國地形圖〔1枚〕〔本文(表, 地図共)〕一～三百六十八 本書〔日本政治地理〕之批評一～二

正價金壹圓卅錢 <早大図>

11 新撰日本地理 高等師範學校教授 矢津昌永著

九善株式會社 明治三十五年四月十日發行 菊判

日本之地體〔1頁〕 新撰日本地理序言一～二 新撰日本地理目次一～六 〔本文(図共)〕一～百八十六 附録(地方廳轄表一～十二, 陸軍配備表〔1表〕)

<一橋図>

(備考) 新撰日本地理序言

近今我國ノ進歩ハ實ニ目覺シク曩ニハ二十七八年ノ戰勝トナリ。次テ北清ニ於ケル揚武トナリ。今又日英同盟トナリ。確ニ此國ハ世界列強ノ資格ヲ有スルニ至レリ。此時ニ當リ我有爲ノ繼承者ヲ導クヘキ地理教科書ニシテ豈ニ之レカ先導ヲナスヘキ者タラスシテ可ナランヤ、是レ此ノ新撰日本地理ノ著アル所以ナリ。

本書ノ組織ハ主トシテ明治三十五年二月文部省訓令中學校教授要目ノ順序ヲ採レリ。(後略)
(P. 1～2)

(内容) 新撰日本地理目次

緒論

大洋 大洲及島嶼 兩極及赤道 氣候帶 經緯線 地圖

日本地理總論^{註1}

位置 地勢 氣候 住民 政治 生業 交通

地方誌

(府県名) 臺灣總督府

附録

注1：各項の細目は略す。

11-A 新撰日本地圖

丸善株式會社 明治三十六年五月二十日發行 菊判

新撰日本地圖序言一～二 新撰日本地圖目次一～二 [地圖][10枚]

正價金貳拾八錢 <国会図>

(備考) 新撰日本地圖序言

新撰日本地圖ハ主トシテ新撰日本地理ニ伴隨シ中等學校ニ於ケル日本地理學習者ノ爲メニ編纂セリト雖モ地名ノ如キハ必ズシモ該書籍ニ記載セル地名ノミニ限ラズ稍精細ナル註記ヲ加ヘタリ、是レ學習ノ際其地ノ附近及ビ其諸關係等ヲ明確ナラシメンガ爲ナリ。

本圖ハ又獨リ地理學習用ニ供スルノミナラズ旅行用若クハ歴史其他ノ參照用ニモ資センコトヲ期セリ。(後略) (P. 1～2)

(内容) 新撰日本地圖目次

第一 日本帝國全圖

第二 關東全圖(府県名)

第三 奥羽及北國圖(県名)

第四 北海道圖

第五 關西及北國圖(県名)

第六 近畿全圖(府県名)

第七 中國及四國圖(県名)

第八 九州全圖(県名)

第九 臺灣全圖

第十 諸島集圖(島名)

12 地理學小品^{○注1}

民友社 明治三十五年七月二十七日發行 四六判

富士山圖(コロタイプ)[1枚] 地理學小品自序[1頁] 目次一～二 [本文]一～三〇六

定價金參拾五錢 <国会図>

注1：早大図に表紙，口絵の欠落した再版本が所蔵されている。再版の出版年は『明治卅五年九月十五日再版印刷發行』。

(備考) 地理學小品自序

地理學小品は余か平生地理學習の際天然に触れ人事に接し隨時隨感乃ち筆を驅りて地理的に觀察し地理的に解釋したる小品文なり今茲に民友社に於て發刊の舉あるに陰し頗る訂正を施

したれども尙ほ恐らくは及ばざる所多からんことを觀者冀くは微意の存する所を看取し其瑕瑾を恕せば幸甚と云爾

明治三十五年西南氣仮風を浴しつゝ 著者識

13 新撰中地文學[□] 高等師範學校教授 矢津昌永著

丸善株式會社 明治三十六年一月十七日修正六版發行^{注1} 菊判

新撰中地文學自序一～二・新撰中地文學目次一～九〔本文(図共)〕一～二百二十八

正價金七拾五錢^{注2} <国会図>

注1：本書の奥付によると、初版は『明治三十二年二月十六日發行』。

注2：奥付にペン字で手書してある。

(備考) 新撰中地文學自序

本書は新撰日本地理及外國地理に續き、中等學校に於て高級生に課すべき地文書なり。其程度は總て既得の智識を標準とし、既に我郷國及外國の地誌を學びし者に向つて、益々思想の範圍を擴め、進んで『地球』と謂へる大問題に就きて簡易の説明を與へ、以て中等教育に於ける地理全科を綜合完結せしものなり。

書中の順序排列は、専ら明治三十五年二月、文部省訓令第三號に基けり、而して其分量は、余の實驗並に中等學校に於ける、授業時數を參考して編成せり。^{注3} (後略) (P. 1)

注3：本稿の第IV章矢津昌永の生涯を参照。

14 日本地理[□]^{注1} 矢津昌永講述

〔早稻田大學出版部藏版〕 菊判

目次一～八〔本文〕一～七六一

<早大図>

注1：標題紙には『明治卅七年度講義録』と記入され、「早稻田大學圖書館 和漢圖書分類目録(十一)」昭和十五年七月現在(以下『早大目録』と略す。)に於ても、『早稻田大學歴史地理科明治三七年度講義録』と付記してある。本書の請求番号はル三(類)一二八四(号)。

(内容) 目次^{注2}

序説 總論 邦制編 經濟編 交通編 殖産編 外交貿易編 地方誌

注2：細目は略す。㊦14-Aも同様。

14-A 日本地理[□]^{注1} 矢津昌永講述

〔早稻田大學出版部藏版〕 菊判

目次一～七〔本文〕一～六三三

<早大図>

注1：標題紙には『明治三十八年度講義録』と記入され、「早大目録」によると、『早稲田大學歴史地理科明治三十八年度講義録』と付記してある。本書の請求番号はル三(類)一三八九(号)。

(内容)

緒論 自然地理 人文地理 地方誌

14-B 日本地理^{□注1} 矢津昌永講述

〔早稲田大學出版部藏版〕 菊判

目次一〜十二 〔本文〕一〜五八三

<早大図>

注1：「早大目録」によると、『早稲田大學歴史地理科明治四〇年度講義録』と付記してある。本書の請求番号はル三(類)一六六五(号)。

(内容) 目次

緒論 自然地理 人文地理 地方誌

15 大日本地理集成 全[□] 矢津昌永 角田政治 小平高明合著

隆文館 明治三十九年六月一日發行 菊判

〔箱根蘆の湖より離宮及び駒岳火口丘を望む、その他写真〕〔4枚〕 大日本地誌集成序〔4頁〕
大日本地理集成目次一〜八 日本郡島地質圖〔1頁〕 〔本文(地図・図共)〕一〜六七二 附表一〜四

定價金壹圓八拾錢 <慶図>

(備考) 大日本地誌集成序

戦勝國の榮を荷へる日本帝國の國粹果して如何、是れ外人の頻りに知らんことを勞むる所なり。故に地理に歴史に將た美術に苟も我が國の事情を知るに資すべき誌籍の研鑽は當今外人間の新流行なり。其れ然り、然るに顧みて本邦人の自國を知るの程度果して如何を回想すれば亦報然たらざるを得ず。特に自國地理上の智識の如き更に索然たるものあるを覺ゆ。是れ種々の原因あるべしと雖ども從來繁簡その中庸を得たる道當の書籍なかりしも確に其の一大原因たらずんばあらず。本書は實に其の要望の見地より筆を起せるものにして先づ國民の指導者たるべき教育家諸君の參考書たるを以て自ら任せり。次に地理研究篤志家諸君の中庸の研究書たるを以て自ら任せり。次に自國の聲價を公平に知らんと欲する經世家諸君の座右の伴侶たるを以て自ら任せり。(中略)

今著者等用意の要項を左に開陳せんとす

一 凡そ地理學は土地と人生との間には自ら親密なる關係ありて或は因となり或は果となるの理法を求むる理學なるを以て本書は單に記載的に流るゝの通弊を避けたり。都邑の如き其の建設せられ又其の發達せる自然的要因より説き起して將來の運命をも類推せんことを勉めたり。

(後略)

(内容) 大日本地理集成目次

第壹篇 自然地誌 (細目略)

第貳篇 人文地誌 (細目略)

第參篇 處誌 (地方内の府県名略)

關東地方 奥羽地方 本州中部地方 近畿地方 中國地方 四國地方 九州地方 北海道 臺灣 樺太 關東州租借地

第四篇 將來の我國民

附表

15-A 大日本地理集成 全 訂正再版 高等師範學校教授 矢津昌永 熊本縣師範學校教諭 角田政治 佐賀縣師範學校教諭 小平高明合著

隆文館 明治三十九年九月廿五日訂正再版發行 菊判

〔箱根蘆の湖より離宮及び駒岳火口丘を望む、その他写真〕〔4枚〕 大日本地誌集成序〔4頁〕
大日本地理集成目次一〜八 日本郡島地質圖〔1頁〕〔本文(地図・図共)〕一〜六七二 附表一〜四

定價金壹圓八拾錢 <国会図>

15-B 大日本地理集成 全 矢津昌永 角田政治^{注1} 小平高明著

隆文館 明治四十四年四月二十日發行 菊判

序一〜四 例言一〜二 大日本地理集成目次一〜八 大日本地理集成挿畫目次一〜五 在留帝國民分布圖〔1頁〕〔本文(地図・図共)〕一〜一〇三四

定價金貳圓五拾錢 <国会図>

注1：奥付によると、「著作代表者 角田政治」と記されている。

(備考) 序

明治三十九年陽景、余等大日本地理集成を上梓せしに、意外にも江湖の賞讃を博し暮年ならずして版を重ねる七八に迫り。明治四十一年の暮不幸にして版型祝融の災に罹り市に版を絶つの已むなきに至りしが、好學者の需要衰へずして爾來各地より該書の重版を促すこと頻々たり。(後略) (P. 1)

例言

(前略)

一 韓國併合の結果面積、人口、種族等に左の異同あり、讀者先づえが訂正を乞ふ。(中略)

我國の種族は大和民族、アイヌ種族、支那種族、臺灣蕃族、ギリヤーク種族、オロツコ種

族の外韓族を加へたり。

明治四十四年四月

著者 (P. 2)

16 日本地理講義^{注1} 高等師範學校講師 矢津昌永講述

大日本中學會 〔刊年不明〕 菊判

日本地理目次一～二 〔本文(図共)]一～二〇一

(非賣品) <国会図>

注1：この表示は標題紙による。本書は和装本の形態で製本がなされている。(帝国図書館で行う。)題簽には次のように記るされている。「日本地理講義 三十年度第一學級講義録 矢津昌永 大日本中學會」。

(内容) 日本地理目次

總論

地方誌(地方名)

附圖

16-A 日本地理講義^{注1} 高等師範學校講師 矢津昌永講述

大日本中學會 〔刊年不明〕 菊判

日本地理目次一～二 〔本文(図共)]一～二〇一

(非賣品) <国会図>

注1：⊗16の注1と同様。但し、題簽は次の通りである。「大日本中學會三十年度〔第〕二學級講義録 日本地理 矢津昌永」。

16-B 日本地理講義^{注1} 高等師範學校講師 矢津昌永講述

大日本中學會 〔刊年不明〕 菊判

日本地理目次一～二 〔本文(図共)]一～二〇一

(非賣品) <国会図>

注1：⊗16の注1と同様。但し、題簽は次の通りである。「大日本中學會三十一年度 第一學級日本地理講義 矢津昌永」。

17 地文學講義^{注1} 高等師範學校講師 矢津昌永講述

大日本中學會 〔刊年不明〕 菊判

地文學講義目次一～四 〔本文]一～一九四

(非賣品) <国会図>

注1：⊗16の注1と同様。但し、題簽は次の通りである。「大日本中學會三十年度 第三學

級講義録 地文學 矢津昌永」。

(内容) 地文學講義目次^{注2}

地文學總論 天体トシテノ地球 氣界 空氣ノ運動〔風の事を意味する〕 地球ノ發音〔育の誤り〕 地球ノ比重 陸地論 山脈我ハ山系 嶋嶼 鑛泉 火山 火山配布 海嘯 内地水 泉 河 湖 大海盤 海水 海底ノ状態 海水ノ運動 氣候

注2：細目は略す。

(c) 世界地理

18 亞細亞地理 矢津昌永編

丸善商社^{注1} 明治二十四年三月十一日印刷及出版 四六判

亞細亞地理例言一～五 亞細亞地理目次一～三 〔本文(地図共)〕一～百三十五 正誤表〔2頁〕

〔三十五錢〕^{注2} <一橋図>

注1：⊗2の注2と同様。

注2：⊗3の注3と同様。なお、日付は『明治二十四年五月九日』。

(備考) 亞細亞地理例言

(前略) 此書ハ元來余カ諸中等學校生ノ爲メニ講セシ所、講時、限アリ固ヨリ我亞細亞列邦ノ梗概ヲ摘述スルニ過キズ是ヲ以テ彼ノ望ニ副ハンヲ決シテ希フ所ニアラズ只々勸誘ニ任セ印刷ニ附スルノミ然レモ帝國民トシテ苟モ社會ニ事ヲ成サントスルモノハ此書ノ記スル所ノ如キハ常ニ之ヲ暗知センヲ余ノ甚タ願フ所也、若シ夫レ是ヲ基礎トシテ能ク時々ニ起ル所謂東洋問題ナルモノニ注意セバ恐ラクハ稍々其憾ヲ少フスルニ庶幾ンカ
此書ノ事實ハ諸書ヲ參考セリト雖モ時事問題ノ如キハ時々ノ官報並ニ諸新聞、雜誌等ニ據レリ又今ヨリ幾年前トアルハ明治二十三年ヨリ起算セリ書中或ハ誤謬杜撰ヲ免カレサル所アラバ讀者幸ニ高論ヲ吝ム勿レ

明治二十四年一月三十一日

城水逸史識 (P. 3～4)

(内容) 亞細亞地理目次^{注3}

亞細亞地文 亞細亞政治地理〔各国誌〕

注3：細目は略す。

19 朝鮮西伯利紀行^口

丸善株式會社書店 明治二十七年一月十三日發行 菊判

朝鮮西伯利紀行自序一～二 朝鮮西伯利紀行目次一～十一 〔本文(図共)〕一～百三十二

日本地文學批評一～八、^{日本}帝國政治地理批評一～五十一

〔二十七錢〕^{注1} <一橋図>

注1：㊥3の注3と同様。但し、記入個所は奥付裏広告(P.51)の裏。なお、日付は『明治二十七年二月十四日』。

20 萬國地誌 上巻^口

丸善株式會社^{注1} 明治二十九年三月九日發行 四六判

萬國地誌自序一〜八 萬國地誌例言一〜五 萬國地誌上巻目次一〜四 [本文(地図共)]
一〜百八十五

定價金四拾五錢 <国会図>

注1：㊥3-Aの注1と同様。以下㊥20-A〜Eまで同様。

(備考) 萬國地誌

萬國地誌成ル。茲ニ編述ノ主旨ヲ記シテ以テ序トス。本書ハ日本地誌ニ於テ希望セル四要
點ノ主旨ヲ益々進ンテ一層其範圍ヲ擴メタルモノ也。(中略)我帝國ヲ中心トシ基礎トシ總テ我
國ト比較的ニ考究シ彼ノ長ヲ採リテ我短ヲ補フモノトシ、歐米の地誌即チ翻譯的地誌ノ舊套ヲ
去リテ必ス日本のニ學ハサルベカラス。(中略)要スルニ世界ハ我郷ニシテ四海我兄弟也、我郷
ノ山河到ル處棲ムベク、我郷ノ天産悉ク利用スベシ、我兄弟ノ消息傳フベク、我兄弟又悉ク交
ルベシ、此思想以テ萬國地誌ヲ終ルベキ也

明治二十九年紀元節

著者識 (P. 1, 2, 7〜8)

萬國地誌例言

一 本書ノ用意ハ序言ニモ示セル如ク從來ノ萬國地誌ハ概シ『歐米ノ地誌ヲ翻譯シ來レル
物ナルヲ以テ歐洲若クハ米國ノ學生ニ課スベキ書』ニシテ固ヨリ本邦學生ノ爲ニ適切ナル物ニ
非ス本書ハ其通弊ヲ認メ外國地誌ヲ成ルベク日本のニ學バシメンヲ期セリ

二 各國誌ハ大抵某國實地遊歷ノ學者ニ就テ々々其現況ヲ糺シ其事實ヲ確メ學生ヲシテ其
國ノ實勢ヲ誤ラザシメンヲ勞メタリ

三 前項ノ外、通商局出版ノ通商彙纂。Statesman's Year Book 1895 各公使館、領事館
報告等ヲ以テ之ヲ補ヘリ

四 地名、人名ノ讀方、書方ハ地理歴史名稱會議決ノ方針ニ據レリ (後略) (P. 1〜2)

(内容) 萬國地誌上巻目次^{注2}

總叙 亞細亞洲總論 各國誌

注2：細目は略す。㊥20-B, ㊥20-Dも同様。

20-A 萬國地誌 上巻

丸善株式會社 明治三十年二月十三日増補訂正再版發行 四六判

萬國地誌自序一〜八 萬國地誌例言一〜五 萬國地誌上巻目次一〜四 [本文(地図共)]

一～百八十五

定價金四拾五錢 <国会図>

20—B 中學萬國地誌 中巻□

丸善株式會社 明治二十九年四月二十日發行 四六判

中學萬國地誌中巻目次〔三頁〕 歐羅巴圖〔1枚〕〔本文(地図共)〕一～二百四

定價金五拾錢 <国会図>

(内容) 中學萬國地誌中巻目次

歐洲總論 各國誌

20—C 中學萬國地誌 中巻

丸善株式會社 明治三十年三月二十日増補訂正再版發行 四六判

中學萬國地誌中巻目次〔3頁〕 歐羅巴圖〔1枚〕〔本文(地図共)〕一～二百四

定價金五拾錢 <国会図>

20—D 中學萬國地誌 下巻□

丸善株式會社 明治二十九年十一月十六日發行 四六判

中學萬國地誌下巻目次一～七 亞弗利加(ノ地圖)〔1枚〕〔本文(地図共)〕一～七十, 一～百一, 一～四十六

<国会図>

(内容) 中學萬國地誌下巻目次

亞弗利加洲總論 各國誌 北亞米利加洲總論 各國誌 南亞米利加總論 各國誌 太平洋洲
又濠太刺利亞洲總論 各部誌

20—E 中學萬國地誌 下巻

丸善株式會社 明治三十年四月十八日増補訂正再版發行 四六判

萬國地誌下巻目次一～七 亞弗利加(ノ地圖)〔1枚〕〔本文(地図共)〕一～七十, 一～百一, 一～四十六

定價金五拾五錢 <国会図>

21 新編中學地理 外國誌□ 上巻下巻 →⊗7—A

22 中地理學〔外國誌〕□ →⊗9—D～G

23 新撰外國地理 高等師範學校教授 矢津昌永著

丸善株式會社 明治三十四年十一月三十日發行 菊判

新撰外國地理序言一～三 〔国旗の色別表示〕三 新撰外國地理目次一～五 〔本文〕一～二百三十六

〔正價金七拾五錢〕^{注1} <国会図>

注1：奥付に手書された価格を参考にする。

(備考) 新撰外國地理序言

新撰外國地理ハ主トシテ新ニ定メラレタル中學校ニ於ケル地理科授業時間数ニ配當シテ編纂シタルモノナリ故ニ紙数ハ二百三十餘頁ヲ以テ完結トセリ。

師範學校又ハ地理科教授時間ニ較々餘裕アル學校ニ於テハ前著中地理學外國誌(三訂第十二版)ヲ課センコトヲ望ム、尙以上ヲ望マハ萬國地誌(三冊)若クハ近刊スヘキ高等地理ヲ參考スヘシ。

本書ニ就テ外國地理ヲ學習スル者ハ、既ニ學ヘル日本地理ノ事實ハ必ス常ニ念頭ニ置キ、是ヲ以テ中心トシ基礎トシ外國ノ風土、國勢、人情、風俗、等ヲ比較的ニ考究シ、以テ我國ノ世界ニ於ケル地位ヲ知り、併セテ各國ノ概況ヲ知り以テ勉ムキ教訓ヲ得遂ニ四海兄弟、萬國共通ノ意義ヲ明ニスヘシ。我帝國ノ條約國ハ較々之ヲ詳述セリ、而シテ其各國名ハ其國名稱及英稱ヲ併記シ、又先頭ニハ國々ノ記章タルヘキ國旗ヲ掲ケ、其國風ヲ聯想セシムベキ標識トセリ。

明治三十四年天長節

著者識 (P. 1～3)

(内容) 新撰外國地理目次

亞細亞洲總論(各国名) 太^マ洋洲總論(各国名) 歐羅巴洲總論(各国名) 阿非利加洲總論(各国名) 北亞米利加洲總論(各国名) 南亞米利加洲總論(各国名)

23—A 新撰外國地理 高等師範學校教授 矢津昌永著

丸善株式會社 明治三十五年三月二十五日訂正再版發行 菊判

新撰外國地理序言一～三 修正第二版序言三 〔国旗の色別表示〕四 新撰外國地理目次一～六 〔本文〕一～二百五十八

<国会図>

(備考) 修正第二版序言

今ヤ初版ノ誤謬ヲ正シ第二版ヲ刊行スルニ際シ恰モ文部省訓令ヲ以テ中學校教授要目ヲ公布セラレタリ因リテ其地理科要目ニ準據シテ増補修正ヲ加ヘタリ

明治三十五年三月上浣

著者再識 (P. 3)

24 世界地理學 日本高等師範學校教授 矢津昌永著 清國留學生 吳啓孫譯

丸善株式會社 明治三十五年十月十八日發行 菊判

〔序文〕〔7頁〕凡例一～二 世界地理學目次一～七 〔本文〕一～二九〇 〔広告（矢津昌永先生所著地學書類目）〕〔1頁〕

<国会図>

25 高等地理 歐羅巴洲之部 卷之壹^{注1} 矢津昌永 赤星可任共著

丸善株式會社 明治三十六年七月廿五日發行 菊判

高等地理總體目次〔1頁〕 高等地理序言一～三 小引一～二 高等地理目次一～四 歐羅巴洲人口ノ配布圖〔1枚〕 〔本文〕一～四八二

正價金壹圓（高等地理） <国会図>

注1：奥付の書名表示は「高等地理一の巻」。

（備考）小引

高等地理編纂ニ際シ之レニ引用若クハ參考セシ圖書ハ勢各種多樣ノ圖書ニ亘レリト雖モ本書ニ於テ其最モ負フ處ノ圖書ハ左ノ如シ

Philip's Advanced Class-Book of Modern Geography.

The International Geography.

Stanford's Compendium of Geography.

The Statesman's Year-Book 1900—1903.

Lippincott's Pronouncing Gazetteer.

The Times Atlas.

特ニ歐羅巴編ニ於テハ Philip's Modern Geography ヲ骨子トシテ編述セリ

歐羅巴洲ノ編ハ最初ニ編述セルヲ以テ其引用セル統計類ハ稍々年ヲ經タルニヨリ更ニ一千九百三年ノ統計書ニヨリテ諸列強ノ海軍力及各國ノ商船噸數比較。鐵鑛輸出比較。石炭ノ輸出額比較。國債負擔額比較等ヲ別圖トシテ挿入セリ又各國十萬以上ノ大市人口表モ卷末ニ附シテ本文ノ補正トス

明治三十六年緑樹重陰之候

著者又識（P. 1～2）

（内容）高等地理目次

歐羅巴洲^{注2}

總敘（境界 廣袤 地貌 沿岸 地勢 河流 氣候 產物 住民 商業 政治）

（各国名）

注2：細目は略す。

25-A 高等地理 歐羅巴洲之部 卷之壹^{注1} 矢津昌永 赤星可任共著

丸善株式會社 明治三十九年十月五日三版發行 菊判

高等地理歐羅巴洲再版序言一～二 高等地理序言一～四 小引一～二 高等地理目次一～四
 歐羅巴洲人口ノ配布圖〔1枚〕〔本文〕一～四八二〔奥付裏広告(世界物産地誌, 高等地理,
 日本政治地理)〕〔2頁〕

正價金壹圓貳拾錢 (高等地理) <国会図>

注1: ㊦25の注1と同様。

(備考) 高等地理歐羅巴洲 再版序言

高等地理第一卷歐羅巴洲ノ編ハ本年八月初メテ世ニ公ニセリ爾來三閱月ニシテ初版既ニ盡
 キ今再版發刊ノ運ニ至レリ是ヲ以テ世人ノ世界的智識ヲ探求セラルルノ程度略窺と知ルヲ得ベ
 シ。今ヤ我國ハ日本ノ日本ニアラズシテ亞細亞ノ日本ナリ獨リ亞細亞ノ日本ニアラズシテ世界
 ノ日本ナリ。世界的事情ノ要望斯克火急ナル當然ト言フベシ茲ニ再版剞劂ニ際シ一言シ併セテ
 初版ノ諸批評ニ對シ謝意ヲ表スル爲メ之ヲ卷後ニ附ス

明治三十六年十一月

著者識 (P. 1～2)

26 高等地理 阿非利加洲部 卷之貳^{注1} 矢津昌永 赤星可任共著

丸善株式會社 明治三十六年十一月廿一日發行 菊判

高等地理總體目次〔1頁〕 高等地理阿非利加洲序言一～四 阿非利加鐵道圖〔1枚〕 高等地理
 目次一～六〔本文〕一～三〇四〔奥付裏広告(高等地理, 日本政治地理)〕〔2頁〕

正價金壹圓 (高等地理) <国会図>

注1: 奥付の書名表示は「高等地理二の卷」

(備考) 高等地理阿非利加洲序言

(前略) 亞細亞ノ極東ニ國スル我邦人ハ本洲ヲ以テ昔日ノ如ク徒ニ遠シトノミ想フベカラ
 ズ又唯無關係ノ蠻地トノミ嘲ルベカラズ闇黒界裏電光一閃眼ヲ射ラントスルモノアリ徒ニ眼ヲ
 先輩國ニ聽クベシト雖トモ而カモ之ヲ行フベキ餘地ハ後進國ニ存セリ。余輩ノ筆ヲ阿非利加ニ
 採ル微意亦常ニ茲ニ在リ。唯淺見寡聞未ダ詳悉セリト言フベカラズト雖ドモ之ニヨリテ阿非利
 加ノ現勢一斑ヲ窺フコトヲ得バ幸甚シ。本編ノ事物ノ如キハ總テ前卷歐羅巴洲ノ例ニ據ルト爾
 云

明治三十六年天長節

矢津昌永識 (P. 3～4)

(内容) 高等地理目次

阿非利加洲^{注2}

總敘(境界 廣袤 沿岸 地勢 山誌 水誌 氣候 產物 住民 交通機關 探検 政
 治的區劃)

(地域・国名)

注2: 細目は略す。

26-A 高等地理 阿非利加洲部 卷之貳^{注1} 矢津昌永 赤星可任共著

丸善株式會社 明治三十九年十月八日三版發行 菊判

高等地理總目次〔1頁〕 高等地理阿非利加洲序言一～四 阿非利加鐵道圖〔1枚〕 高等地理目次一～六 〔本文〕一～三〇四 〔奥付裏広告(世界物産地誌, 日本政治地理)〕〔2頁〕

正價金八拾錢 (高等地理) <国会図>

注1: ㊟26の注1と同様。

27 高等地理 清國地誌^口

丸善株式會社 明治三十八年六月二十八日發行 菊判

高等地理總目次〔1頁〕 高等地理清國地誌目次一～八 東半球地質圖〔1枚〕 〔本文〕一～三九〇 〔奥付裏広告(日本政治地理, 高等地理)〕〔2頁〕

〔正價金壹圓貳拾錢〕^{注1} (高等地理) <一橋図>

注1: ㊟25-Aの奥付裏広告より。

(備考) 高等地理 序言

清國ノ開發ハ今ヤ世界列國ノ共同的事業タルノ傾向アリ。久シク支那寶庫ノ鍵鑰ヲ預リシ支那人ハ。其レ自身ノ力ヲ以テ寶庫ノ堅扉ヲ開クノ祕術ヲ知ラズ。惘然自失ノ状態ニアリ。是ニ於テ他ノ列國ハ各々起チテ自ラ開扉ノ功ヲ奏セント競フモノ、如シ。是レ鴉片戰役以來支那ニ關スル外國交渉事件ノ漸次頻繁トナレル所以ナリ。(中略)

其大部ハ未ダ『不合鍵ノ祕匣』裏ノ物タルニ於テオヤ。今此書記スル所其大要ニ過ギズト雖モ。地理學上ノ鉄案ニ據リテ支那ヲ科學的ニ解説セルハ。聊カ本書ノ特色ナリト信ズル所ナリ。又人文地理上ニ關スル事項ハ。多年支那研究ニ志ス教諭渡邊信治氏ノ補草スル所ニ係ル。世人本書ニヨリテ茫漠不明ノ支那大土ノ一斑ヲ窺フヲ得バ幸甚。記シテ以テ序トス。

明治三十八年五月日本海々戰大勝報到ル日

著者識 (P. 1, 3～4)

(内容) 高等地理 清國地誌目次^{注2}

清國 地勢 地形 水誌 水岸 海流 氣候 天產物 住民 交通 生業 政治 地方誌

注2: 細目は略す。

27-A 高等地理 清國地誌 矢津昌永 渡邊信治共著^{注1}丸善株式會社^{注2} 明治四十年九月二十八日三版發行 菊判

〔高等地理總目次〕〔1頁〕 高等地理序言一～四 高等地理清國地誌目次一～八 東半球地質圖〔1表〕 〔本文〕一～三九〇

正價金壹圓貳拾錢 (高等地理) <早大図>

注1: ㊟27の(備考)序言を参照。

注2: ㊟3-Aの注1と同様。

28 高等地理 亞細亞洲[□] 高等師範學校教授 矢津昌永著

丸善株式會社 明治三十九年五月五日發行 菊判

高等地理總體目次〔1頁〕 高等地理亞細亞洲序言一～四 高等地理目次一～三 〔本文〕一～三四〇

正價金壹圓 (高等地理) <国会図>

(備考) 高等地理 亞細亞洲序言

歐米ノ地理書ニヨリテ學ビ難キハ亞細亞ノ地理ナリ、英書ト云ヒ、米書ト云ヒ、將タ獨逸書ト云ヒ、各自國ヲ中心トシ自國トノ關係地、若クハ其貿易地ノ地理ヲ主トシテ詳述シ、自國ト關係深カラザル亞細亞洲ノ如キハ輕々筆ヲ走ラセ、僅數頁若クハ十數頁ヲ費スニ過ギズ、籍ヲ亞細亞ニ有シ、其指導者ヲ以テ任ズル吾人ハ、決シテ斯ル單簡ナル地理書ニ甘ンジテ、吾人ヲ圍繞スル地理的事情ノ解決ヲ覓ムベキニアラズ、看ヨ亞細亞ノ地域ハ世界陸地ノ三分ノ一ヲ占ムルニアラズヤ、亞細亞ノ人衆ハ世界ノ過半ヲ占ムルニアラズヤ、而シテ我が日本ハ實ニ其一國ニアラズヤ、吾人ハ實ニ其一員タルニアラズヤ、亞細亞ノ事豈ニ他洲人が雲煙過眼視スルト同一視スベケンヤ (後略) (P. 1～2)

(内容) 高等地理目次^{注1}

亞細亞洲

總叙(位置 廣袤 海岸 地貌及大體 區域 氣候 天產物 住民 宗教 交通 沿革)
(地域・国名)

注1：細目は略す。

29 世界物產地誌[□] 矢津昌永 樺島駒次 杉浦隆次 増山 明共著

丸善株式會社 明治三十九年八月十二日發行 菊判

世界物產地誌序言一～三 凡例一 世界物產地誌目次一～十六 〔本文〕一～七一二 内外貨幣比較表一 内外度重衡對照表二 〔奥付裏広告(高等地理、日本政治地理)〕〔2頁〕

(正價金貳圓)^{注1} <一橋図>

注1：㊦30の奥付裏広告より。

(備考) 凡例

一 本書は現今世界に於て最も重要視せらるゝ產物凡六百有餘品に就き之を(一)農產物(二)畜產物(三)林產物(四)水產物(五)鑛產物(六)工產物の六編に大別し更に之を十六章に分ち產物の性質、狀態、分布並に需用供給等を概説して世界經濟の大本を示し物貨共通の理を窺はしめ以て地理を學ぶ人又は實業家等の參考に供する目的を以て編纂せり (後略)
(P. 1)

30 高等地理 南アメリカ
利加洲

丸善株式會社 明治四十一年十一月廿六日發行 菊判

高等地理南亞米利加洲自序一～五 高等地理目次一～三 南米地質圖〔1頁〕〔本文〕一～五
九八 〔奥付裏広告〕〔3頁〕

（高等地理）＜早大図＞^{注1}

注1：本文の第1頁目に『明治四十二年二月十五日 著者氏寄贈』と記されている。また、国会図所蔵の書物は地質圖が欠ている。

（備考）高等地理南亞米利加洲 自序

（前略）我ガ國民タル者若シ此ノ好與ノ南米ヲ措カバ、將來何レノ地ニ向ツテ盈雄セル勢
カヲ發展セントスルカ、我ガ國民ハ實ニ邦家百年ノ長計トシテ、南米ニ注目セザルベカラズ、
又南米ヲ研究セザルベカラズ、而シテ南米ニ發展セザルベカラザルナリ。本書ハ乃チ此ノ見地
ヨリシテ筆ヲ染メ、『高等地理』中他ノ洲ニ比シテ割多ク縷述シ、紙數殆ド六百頁ヲ費セリ、
特ニ未ダ世間ニ多ク紹介セラレザル南米ノ歴史、沿革ヲモ略記述セリ、要ハ前述ノ微意ニ外ナ
ラズ。（後略）（P. 3～4）

（内容）高等地理目次^{注2}

南亞米利加洲

總敘（位置境界 廣袤・面積 沿海 地勢 山誌 水誌 氣候 天產物 人誌 交通
沿革）

各國誌

注2：細目は略す。

31 萬國地理^{注1} 講師 矢津昌永

〔大日本中学會〕〔刊年不明〕 菊判

〔本文〕一～二〇六

＜国会図＞

注1：この表示は巻頭による。題簽は次の通りである。「大日本中學會三十年度 第二學級
講義錄 萬國地理 矢津昌永」。

31-A 萬國地理^{注1} 講師 矢津昌永

〔大日本中学會〕〔刊年不明〕 菊判

〔本文〕一～二〇六

＜国会図＞

注1：この表示は巻頭による。題簽は次の通りである。「大日本中學會三十年度 第三學級
講義錄 萬國地理 矢津昌永」。

31-B 萬國地理 完^{注1} 高等師範學校講師 矢津昌永講述

大日本中學會〔刊年不明〕菊判

萬國地理目次一～六〔本文〕一～三二一

(非賣品) <国会図>

注1：㊟16の注1と同様。但し、題簽は次の通りである。「大日本中學會 三十一年度 第二學級講義錄 萬國地理 矢津昌永」。

(内容) 萬國地理目次^{注1}

世界地理緒言

亞細亞洲總論(各國誌)

歐羅巴洲總論(各國誌)

阿弗利加洲總論(各國誌)

亞米加洲 北亞米利加洲總論(各國誌)

南亞米利加洲〔總論〕(各國誌)

大洋洲總論

32 東洋商業地理^{注1} 矢津昌永講述

〔早稻田大學出版部藏〕〔刊年不明〕菊判

東洋商業地理目次一～一〇〔本文〕一～四〇四〔十一～一二落丁〕

<早大図>

注1：標題紙の書名わきに『明治卅九年度講義錄』と記入されている。また、「早大目錄」(P. 254)によると、『明治三九年度早稻田商業講義』と付記されている。本書の請求番号はネ一(類)一三六一(号)。

(内容) 東洋商業地理目次^{注2}

序言 韓國地理 清國地理 西伯利地理 暹羅地理 印度支那地理 馬來半島 馬來群島

比律賓群島 ボルネオ島 セレベス島 和蘭領馬來諸島 印度地理

注2：細目は略す。

32-A 東洋商業地理^{注1} 矢津昌永講述

〔早稻田大學出版部藏〕〔刊年不明〕菊判

東洋商業地理目次一～一〇〔本文〕一～四〇四

<早大図>

注1：標題紙の書名わきに『明治四十年講義錄』と記入されている。また、「早大目錄」(P. 254)によると、『明治四〇年度早稻田商業講義』と付記されている。本書の請求番号はネ一(類)一三〇七(号)。

(d) 地 図

33 日本地図[□] →㊤2-B

34 日本地図

丸善株式會社書店 明治二十八年三月十四日發行 菊判

日本地図例言〔2頁〕〔凡例〕〔1頁〕 日本百山高度比較〔1頁〕〔地図〕〔7枚〕

定價金參拾五錢 <国会図>

(備考) 日本地図例言

一 本圖ハ地質局ノ實測圖、日本帝國全圖ヲ基トシ、特ニ中等教育ニ適合スルヲ目的トシテ調製セリ又學習若クハ旅行等携帯ノ便ヲ慮リ之ヲ數幅ニ分テリ (後略)

34-A 日本地図[□]

丸善株式會社 明治廿九年十二月二十九日訂正増補四版發行 24cm×17cm

日本地図例言〔4頁〕 日本百山高度比較〔1頁〕〔凡例〕〔1頁〕〔地図〕〔10枚〕

定價金參拾五錢 <国会図>

35 新編中學地理日本誌用地圖 →㊤7-B

36 <sup>中地理學
外學誌用</sup>外國地圖[□] →㊤9-I, 9-J37 <sup>中地理學
日本誌用</sup>日本地圖 完 →㊤9-H38 新萬國地圖[□] 志賀重昂 矢津昌永〔編〕

丸善株式會社書店 明治三十三年八月十一日訂正五版發行^{注1} 四六倍判

新萬國地圖緒言一〜三 新萬國地圖目次〔1頁〕〔地図〕〔9枚〕

<国会図>

注1：奥付によると、初版の出版年は『明治三十一年十月二十五日發行』。

(備考) 新萬國地圖 緒言

一 新萬國地圖ハ、本邦人ノ世界地理的形勢ノ智識ヲ得ントスル者ノ爲メ、特ニ編纂シタルヲ以テ、他ノ外國出版ノ原圖又ハ其翻譯圖ヲ看ルヨリハ、邦人ニ取リテハ、其便益多々ナルベキヲ信ズルナリ。

一 新萬國地圖ハ、予輩等ノ持論タル、『自然ノ土地』ト『人類ノ營作』トヲ、可成的結合連絡セシメントノ趣旨ヨリ、編纂シタルモノナレバ世界萬國ニ於ケル人類ガ、地上ニ働作セル結果ノ重モナル体ハ、圖上ニ収メンヲ期セリ、故ニ本圖ハ、不成文ノ萬國地理書タルコト

ヲ以テ自任セントス。(後略) (P. 1~2)

(内容) 新萬國地圖目次

- (一) 世界列國分領圖 百年前ニ於ケル世界
- (二) 亞細亞洲圖 世界ニ於ケル支那人ノ散布。樺太
- (三) 大日本帝國全圖
- (四) 東部亞細亞洲圖
- (五) 濠斯太刺利亞圖 木曜島
- (六) 歐羅巴洲圖 歐羅巴人ノ散布。希臘コリンス地峽運河
- (七) 亞弗利加洲圖 黑人ノ分散
- (八) 北亞米利加洲圖 太平洋岸日本人ノ散布。墨西哥南部
- (九) 南亞米利加洲圖 『ニカラガ』 運河竣工後ノ航路豫測

39 新撰日本地圖 →㊦11-A

(次の書物は矢津の著作として、書名のみを地理学書等で知ったが、原本を確認することができなかったもの。)

「大地理學」,「地理的日本歴史」,「歴史的地理」,「世界現勢地圖」,「氣界講話」。

(B) 論文の部

- 40 日本北西海岸ノ深雪□ 福井縣尋常中學校教諭 矢津昌永
「地學雜誌」 第一集第四卷 明治二十二年四月廿五日發兌 P. 147~150
- 41 日本地文學ノ批評ニ就キ國民之友及頓智氏ニ□
「地學雜誌」 第一集第七卷 明治二十二年七月二十五日發兌 P. 339~341
- 42 白山之記□ 第五高等中學校教員 矢澤〔津の誤植〕昌永
「地學雜誌」 第一集第十二卷 明治二十二年十二月二十五日發兌 P. 580~583
- 43 熊本の地震□ 第五高等中學校助教諭 矢津昌永
「地學雜誌」 第二集第十六卷 明治二十三年四月廿五日發兌 P. 174~178
(承前) 同誌 第二集第十七卷 明治二十三年五月廿五日發兌 P. 220~224
- 44 最近に於ける熊本地震□ 第五高等中學校助教諭 矢津昌永
「地學雜誌」 第二集第十八卷 明治二十三年六月廿五日發兌 P. 261~265

45 邦國の位置（政治地理一節）□

「地學雜誌」第四集第四十三卷 明治二十五年七月二十五日發兌 P. 323～326

46 中學地文學の批評に就き零丁學士に答ふ□

「地學雜誌」第十集第百拾卷 明治三十一年二月十五日〔発行〕 P. 97～99

47 地文學の定義に就きて□

「地學雜誌」第十輯第百拾貳卷 明治三十一年四月十五日〔発行〕 P. 215～217

48 政治地理研究の方面□

「地理と歴史」第一卷第二號 明治三十三年四月十七日發行 P. 4～10

49 北日本と南日本□

「地理と歴史」第一卷第五號 明治三十三年七月二十日發行^{注1} P. 6～11

注1：この表示は奥付による。裏表紙の日付は『七月十五日』。

50 世界の巨船「ミ子ソタ」號□

「會報」第壹號 明治三十八年五月一日發行 P. 18～21

51 登山の壯快

高頭式編纂「日本山嶽志」博文館 明治三十九年二月四日發行 山嶽諸説〔の部〕 P. 1～3 <早大図>

52 日本之雪□

「地學雜誌」第二十二年第二百五十五號 明治四十三年三月十五日發行 P. 239～248

第Ⅱ章 研究文献目録

ここに掲載した矢津の地理学に関する研究文献目録は次の規則に従って作成された。

A. 収録の範囲

1. 期間

昭和53年7月末日迄の発表論文に限った。

2. 対象とした資料

地理学関係誌を中心に、矢津の地理学を主題としてあつかった論文（書評も含む）で、筆

者が原資料にあたったもののみを収録した。今回は論文の一部で矢津をあつかったものは除いた。

B. 記載方法

発表順に記載し、㊦は前掲の著作目録より引続いている。また、第Ⅲ章 書誌的注解にとり上げてあるものには前章同様に『□』を付した。

1. 記述

構成は第Ⅰ章のB. 2. 論文の記述に準ずる。

2. その他

(1) 使用漢字、かな文字は標題、誌名、筆者名は原資料に従い、略字、当用漢字は使用しなかった。但し、ページづけ、発行年月日の数字はアラビア数字に統一した。

(2) 使用記号は第Ⅰ章の B. 3. (2) に準ずる。

53 日本地文學〔批評〕

「國民之友」 第四拾七號 明治二十二年四月十二日發兌 P. 37~38

54 矢津氏編纂日本地文學□ 硯山生^{注1}

「地學雜誌」 第一集第四卷 明治二十二年四月二十五日發兌 P. 168~170

注1：硯山生とは『小藤文次郎』のこと。（本論文末に氏名を記してある。）

55 矢津氏編日本地文學二就テ□ 山口高等中學校 教諭會員 頓野廣太郎

「地學雜誌」 第一集第六卷 明治二十二年六月二十五日發兌 P. 284~286

56 矢津氏地文學よ就テ□ 第一高等中學 石井万次郎^{注1}

「地學雜誌」 第二集第十四卷 明治二十三年二月廿五日發兌 P. 94~97

注1：石井万次郎に関し、石田は「石井万次郎（第一高等中学生徒、石井ハ万次郎の誤植かそれとも山上万次郎か）」と指摘している。⁴⁾

57 亞細亞地理書の新著□

「地學雜誌」 第三集第二十八卷 明治二十四年四月二十五日發兌 明治二十四年四月二十五日發兌 P. 237

58 矢津氏の日本政治地理□

「亞細亞」 第貳卷第七號 明治二十六年七月十五日發行 P. 17~34

59 日本^{帝國}政治地理 矢津昌永氏著□ 猪間收三郎批評

「地學雜誌」 第五集第五拾五卷 明治二十六年七月二十五日發兌 P. 366～367

60 矢津氏著中學日本地誌に就て□ 静岡縣 酒井淡水生

「地學雜誌」 第七集第七十八卷 明治二十八年六月十日發兌 P. 329～331

61 〔矢津氏の日本地文學〕□

「地學雜誌」 第九集第九十八卷 明治三十年二月十五日發兌 P. 90

62 矢津昌永氏著中學萬國地誌を読む□ 猪間生

「地學雜誌」 第九集第九十九卷 明治三十年三月十五日發兌 P. 146～149

63 中學地文學〔書評〕

「地學雜誌」 第九集第百八卷 明治三十年十二月十五日發兌 P. 588

64 矢津昌永氏著中學地文學を讀みて□ 零丁學士

「地學雜誌」 第十集第百九卷 明治三十一年一月十五日〔発行〕 P. 34～40

65 矢津昌永氏中學地文學の地文學の定義を駁す□ 零丁學士

「地學雜誌」 第十輯第百拾壹卷 明治三十一年三月十五日〔発行〕 P. 160～163

66 新編中學地理（日本誌）〔書評〕

「地理と歴史」 第一卷第二號 明治三十三年四月十七日發行 P. 56～57

67 新編中學地理（外國誌）〔書評〕

「地理と歴史」 第一卷第三號 明治三十三年五月十七日發行 P. 56

68 （新著紹介）高等地理 矢津昌永氏著
丸善書店發行

「地學雜誌」 第拾五輯第百七拾七卷 明治三十六年九月十五日〔発行〕 P. 743～744

69 （新著紹介）韓國地理 矢津昌永著 丸善發行

「地學雜誌」 第拾六年第百九拾號 明治三十七年十月十五日〔発行〕 P. 686

70 世界物產地誌 完〔書評〕□ 小林房太郎評

「地學雜誌」 第拾八年二百十四號 明治三十九年十月十五日〔発行〕 P. 721～722

71 世界物産地誌に對する小林房太郎氏の批評に就きて[□] 杉浦隆次

「地學雜誌」 第拾八年第二百拾六號 明治三十九年十二月十五日〔発行〕 P.874~875

72 矢津昌永氏の「日本政治地理」について[□] 阿部市五郎

「地理學」 第二卷第一號 1934年〔昭和9年〕1月 P.113~118

第三章 書誌的■注解

ここでは第Ⅰ章 著作目録、第Ⅱ章 研究文献目録の書誌的注解を『□』を付した単行書および論文について、掲載の順に注解を行った。

㊦1 地名索引 内外地誌 日本之部

本書冒頭の『發行の要旨』で索引が地名索引の他、字画索引をも付し、地名辞典も兼用できる旨を記している。

なお、本書の姉妹書である、「外國之部」の書誌的事項は次の通りである。

地名索引 内外地誌 外國之部 野口保興

早稲田大學出版部 明治四十一年六月廿八日發行 菊判

目次一~十三 [本文]一~一〇九二 外國地名及人名取調書1~62 外國地名索引1~79

定價金參圓 <早大図>

㊦2 日本地文學

明治20年代前半において従来の翻訳(翻案)地理学から脱皮し、日本の事例を採用して解説を試みた地文学(自然地理)の書物として最も早いもののひとつであろう。執筆当時、矢津が一介の地方教員であったにも拘らず内務省中央气象台、海軍省水路部の報告等のデータを丹念に収集して本書に使用していることは高く評価してよい。(本書は明治26年シカゴ万国博覽会に於て受賞している。)

なお、本書の種本ないしは典拠の書物として、㊦58では「ライン氏著の『ジャッパン』⁶⁾に憑據する所多し」(P.19)と指摘している。また、石山はゲーキー (Archbald Geikie) との関係を決のように述べている。

明治20年代の地文学で、Geikie を参照しないものはなくなってしまうといってもよい。

矢津昌永「日本地文学」にしても Geikie に学んでいるとみられる節がある。⁶⁾

上述の Rein, Geikie の書物と本書との関係についての詳しい調査結果は後日発表したいと考えている。また、本書成立の時代背景、内容の検討についても他の主著(「日本政治地理」,「日本地誌」)と併せて、まとめて発表することとしたい。

「日本地文學」に関する（奥付裏）広告を掲載してある書物は次の通りである。但し、本著作目録の範囲内で、批評、短文が付記されているものに限定。（以下㊦3、㊦10も同様）

1) ㊦2－B：（内容）「毎日新聞」評、「時事新報」批評、「^豊報知新聞」批評、「日本人」批評（明治22年5月7日発兌 24号 P.31～32）、「東洋學藝雑誌」批評（明治22年4月25日発兌 91号 P.214）、「教育時論」批評（明治22年4月5日 143号 P.26）

2) ㊦3、㊦3－A：㊦2－Bと同様。

3) ㊦19：㊦2－Bと同様。

㊦2－B 日本地図

例言にもものべられているように、本図集は「日本地文學」中の挿入図を適宜とりだしまとめたものである。

㊦3 ^{日本}政治地理、㊦10 日本政治地理

「日本政治地理」は『日本政治地理 自序』（著作目録 P.18）に記載されているように、「^{日本}政治地理」を時流にそうように改訂した書物である。両書における『政治地理学』の概念は現在使用されている『政治地理学』（地政学も含めて）とは異なり、『人文地理』に近似している。

両書共、矢津の地理学観を知る上では不可欠の資料ではあるが、内容、構成の比較等については後日、発表する予定である。

「^{日本}政治地理」に関する（奥付裏）広告を掲載してある書物は次の通りである。

1) ㊦3－A：（内容）「國會」（明治26年7月14日 800号）、「亞細亞」（㊦58）、「日本」（明治26年7月21日 1473号）、「時事新報」（明治26年7月28日 3719号）、「東洋學藝雑誌」（明治26年9月25日 144号）、「教育時論」（明治26年7月25日 298号）、「九州日日新聞」（明治26年7月12日13日 3284号）、「國民之友」（明治26年8月3日 198号）、「地學雑誌」(㊦59)、「熊本新聞」（明治26年7月13日 4515号）、「毎日新聞」（明治26年7月28日 6805号）、「東京日日新聞」（明治26年9月27日 6581号）、「龍南會雑誌」（明治26年10月9日 20号）

2) ㊦19：㊦3－Aと同様。

「日本政治地理」に関しては次の通りである。

1) ㊦25－A：（内容）「教育時論」（明治34年5月15日）、「讀賣新聞」（明治34年5月3日）、「國民新聞」（明治34年4月30日）

2) ㊦26、㊦26－A：㊦25－Aと同様。

3) ㊦27、㊦27－A：㊦25－Aと同様。

4) ㊦29：㊦25－Aと同様。

㊦4 ^中日本地誌、㊦4－B ^中日本地誌、㊦4－D ^中日本地誌

本書は中学校、師範学校等で地理教育に従事し、その経験を活かした著作であり、『注意』（著作目録 P.8）にも示されているように地理教科書であり、文部省検定済の書物でもある。

本書は矢津の著作の内では初期に出版された書物であり、また、中学生向きの教科書であるにも拘らず、矢津のその後の著作に本書の思想の影響が強く見られる点からみると矢津の地理学観の原型の一端を本書に見出すことが可能であると考えられる。一例として著者が本書を著述する際、留意した個所として挙げた四点（著作目録 P. 8, ㊥4 備考）は後年出版された他の著作にも見うけられる。

日清戦争の勝利によって、我国は新領土（国土）を獲得した。それを反映して、㊥4—Bより『地方誌』に台湾誌、（附）澎湖諸島の地域が新たに加えられる。この地域に関する記述は「新日本地誌」（㊥5）の（一）、（二）とほぼ同様である。

他の版の出版年を㊥4—Dの奥付より調べてみると次の通りである。

明治二十九年三月廿八日四版發行

明治二十九年四月五日五版發行

明治二十九年四月十一日六版發行

明治二十九年四月十六日七版發行

㊥5 新日本地誌

本書の冒頭は次の通りである。

日本新領地

我帝國ノ新領地ハ日清戦争ニ依リ其戦勝ノ結果トシテ明治二十八年四月十七日、下ノ關係約ニ據リ清國ヨリ左記ノ土地ノ主權、并ニ該地方ニ在ル城壘、兵器製造所及官有物ヲ永遠我國ニ割與シタルモノナリ

新領地ハ左ノ如シ

（一）臺灣全島及其附屬島嶼

（二）澎湖列島

（三）遼東半島及附屬島嶼（P. 1～2）

本文では上述の新領土についてのみ解説を行っている。

㊥7—A 新編中學地理 外國誌 上卷

上卷の奥付裏広告によると、『矢津昌永監修 角田政治編修 新編中學外國地圖 全壹冊 定價金三拾錢』の記事がある。従って、外國誌にも日本誌と同様の付属の地図（帳）が存在した可能性が強い。

㊥9 中地理學, ㊥9—A 中地理學

㊥9と㊥9—Aとの本文の間には多少の相違点（訂正）が見出される。例えば次の通りである。

㊥9の澎湖廳では、

(前略) 又良泊ノ地ナリ。漁翁島ニ燈臺ノ設ケアリ……。 (P.207)

㊥9-Aの澎湖廳では、

(前略) 又良泊ノ地ナリ。今要塞砲兵ヲ置キテ海峡ノ警備トス。漁翁島ニ燈臺ノ設ケアリ……。 (P.207 下線筆者)

㊥9-B 中地理學

㊥9-Bは『訂正版に就いて』(著作目録 P.15)の記述のように、かなり㊥9, ㊥9-Aとは異なる。例えば、地域区分についてみると、㊥9と㊥9-Aは著作目録P.15に示した通りであるが、㊥9-Bでは次の通りである。

北日本

關東(一府, 六縣) 奥羽(六縣)

南日本

關西(六縣) 北國(四縣) 近畿(二府, 三縣) 中國(六縣)

四國(四縣)

九州(七縣附沖繩)

北海道(十一國)

臺灣(三縣, 三廳)

以上のように、『中央高原(三縣)』(新潟, 長野, 山梨)の各県は他の地方へ分類変更される。(新潟→『北國』, 他の二県→『關西』)

㊥9-D 中地理學, ㊥9-E 中地理學

㊥9-Dと㊥9-Eの本文間には多少の相違点(訂正)が見出される。例えば次の通りである。

㊥9-Dのフラクランド群島についての記述では、

(前略) 又火地ノ東方海上に、フラクランド群島アリ, 亞爾然丁ニ屬ス。 (P.415)

㊥9-Eの同所では、

又チラ, デル, フェーゴ (火地)ノ東方海上ニ, フラクランド群島アリ, 亞爾然丁ニ屬ス。
(P.415)

中地理學外國誌(㊥9-D~G)を万国地誌全三冊(㊥20, 20-B, 20-D)と比較してみ

る。中地理學外國誌序言（著作目録P. 16）で既述したように、本書は萬國地誌より総頁数は少なく、教科書用に執筆された。（萬國地誌は文部省検定済ではない。㊥24の広告より）

本書の世界地誌の学習順序は次の通りである。

アジア→大洋洲→ヨーロッパ→アフリカ→北アメリカ→南アメリカ。

以上のような学習順序で、前著萬國地誌とは異り、本書刊行後、明治三十五年に文部省訓令第六号で定められた『中學校教授要目』の内で示されている世界地誌の学習順序と同一である。このよう変化が何故生じたか、その原因については不明である。

㊥9-I 中地理學外國地圖

本地理帳の構成は次の通りである。（筆者作成）

- (一) 亞細亞（縮尺四千五百万分之一）
- (二) 朝鮮（韓國）
- (三) 支那帝國本部及朝鮮，佛領亞細亞，暹羅之北部
- (四) 大洋洲 濠太刺利亞
- (五) 歐羅巴（比例尺二千万分之一）
- (六) 中央歐羅巴
- (七) 亞弗利加
- (八) 北亞米利加（縮尺一千五百万分之一）

㊥12 地理學小品

地理に関するエッセイ集である。本書に収録されている随筆は既に雑誌等へ発表済のものも含まれている。例えば、本書の『北國の深雪』（P. 38～44）は㊥40，本書の『白山』（P. 153～159）は㊥42を再録したものである。

『表日本』『裏日本』という用語がいつ頃から使用し始めたかという点に関し、筆者は先に志賀重昂の場合について発表した。⁷⁾ 矢津に関しては本書中の『表日本及裏日本』（P. 139～152）において明確に定義して使用している。（初出雑誌は不明）なお、矢津の遺族（大川英子氏）の談話によると、『表日本』『裏日本』の用語は矢津が始めて造語したとの事である。（昭和52年11月16日インタビューの際、語られる。）

㊥13 新撰中地文学

明治35年の『中學校教授要目』中の『地理』部門に於ては次の通り学習すべき学年が記されている。

第1学年 日本地理 第2学年 外国地理（4学年迄） 第5学年 地文学

本書の自序によると、新撰日本地理（㊥11），新撰外国地理（㊥23）の次に学習すべきものとし、本書の内容の順序排列はもとよりこの点でも教授要目に対応している。

㊥14 日本地理，㊥14-A 日本地理，㊥14-B 日本地理

3書物共、同名の講義録であるが、㊥14と㊥14-A・㊥14-Bとは内容、構成において異な

る。㊦14の序説では Ritter の地理を中心に説明し、地理教育に関連し次のように述べている。

然るに従来地理は我國に於ては其淵源重もに地質學者の手にありしを以て、比較的に進歩せしは、自然的地理特に地質的地理の方面にして、人事的に關する方面の地理即ち所謂地誌（政治地理若くは人文地理）の研究は甚だ幼稚にして、（中略）地理は天然人事兩方面より觀察考究し而して之を以て個々別々とせず、互に相待ちて連關密着し打て一丸となすことに注意せざるべからず。（P. 5）

以上のように人文・自然地理の双方を重視する旨を主張している。㊦14—A、㊦14—Bの諸論では、「國家的感念を養成するの必要を生ず而して健全なる國家的感念を養成するは地理科の重なる任務なりとす。」（A、B共にP. 2）と述べ、彼の国家意識の強さが見うけられる。

3書とも講義録という書物の性格上、あまり知られていないが、矢津の地理学を知る上で欠くことのできないものであろう。

㊦15 大日本地理集成 全

本書は明治三十九年六月初版以来、四十四年四月迄の5ヵ年余りに多数の読者を得た。その間の事情を「^{最新}大日本地理集成」の序で次のように述べている。

明治三十九年本書を初めて公にするや同好數輩合同の力に據りたるも、元來合著は編纂の統一を缺く處尠からざるを以て、明治四十四年の改版より全然余一箇の編纂に依りたりと雖も、尙從來の關係上合著の名を用ひたるものにして、是れ必ずしも羊頭を掲げて狗肉を賣るの意にはあらざるなり。而かも本書に至りて一切の關係を排し余一箇の名に改めたり。是れ名實共に全かしめんが爲にして、決して他意あるにあらず、讀者之を諒せられよ。

大正三年炎威將に赫々たらんとするの節

角田黃山謹識（上卷序P. 7）

なお、この「^{最新}大日本地理集成 全二卷」の書誌的事項は次の通りである。

（上卷）

角田政治著

隆文館 大正七年十月十五日十五版^{註1} 菊判

定價金參圓參拾錢 <早大図>

712P., 52P.

注1：奥付によると初版は『大正三年八月廿五日發行』。

（下卷）

ある。⁸⁾

㊤34-A 日本地圖

本書の奥付によると、第2、3版の出版年は次の通りである。

明治二十八年九月廿五日訂正増補版發行

明治二十九年四月十八日訂正増補三版發行

例言中に、「一 第四版出版ニ際シ明治二十九年三月勅令ヲ以テ變更セラレタル^〇國境(後略)」と記され、日清戦争の結果が反映されていることが判る。

この事は初版と第4版の内容構成を見ればさらにあきらかである。

初版では、

第一 本州中部 第二 本州東部 第三 本州西部 第四 中國及四國 第五 西海道 第六 北海道 第七 諸群島

第4版では、

第一 大日本帝國 第二 本州中部 第三 本州東部 第四 本州西部 第五 中國及四國 第六 九州 第七 北海道 第八 諸郡島

以上のように、第4版では最初に新領土 台湾を含んだ日本国地図が示され、第1図の上部には、「世界圖 (日本トノ關係)」が付加されている。

㊤38 新萬國地圖

矢津は志賀と共に早稲田大学に於て、教鞭を執っていたが、両者による共作は筆者の調査範囲では本地図帳のみである。本地図帳は例言にも述べられているように、他の地図帳とは趣旨が異なり、ユニークなものである。なお、「地學論叢」(東京地學協會編纂 第四輯 明治42年8月發行)中の、「総裁宮殿下御庭ニ於テ撮影」の写真に両者が一諸に撮影されている。

㊤40 日本北西海岸ノ深雪

深雪地と言われている本土北西海岸地域(福井、金沢、伏木、新潟、秋田)の気温について述べ、『北地即チ寒地ナリ』という思考の誤りをまず指摘する。深雪の原因は冬期の北西の風であるとし、その風はシベリアから日本海を通過、その際、水分を含み、凝集し、連山が障害物となり、運搬された蒸気が降落し、雪または雨をもたらすと矢津は説明している。

本稿は(「地学雑誌」の)『論説』の部に収録。

㊤41 日本地文學ノ批評ニ就キ國民之友及頓智氏ニ

頓野の「日本地文學」に関する疑問点(㊤55)に対する反論。(「國民之友」㊤53にも関連して)

㊤55に(1)対しての矢津の反論。

「其海水〔瀬戸内海〕ハ本邦四近海中ニテ鹽分尤モ濃厚ナリ現今究メラレタル所ニテ凡ソ海水ノ鹽分ハ千分中二十七余、日本四近ノ海ハ千分中凡ソ三十、ナレハ瀬戸内海ハ千分中凡ソ三十四ノ鹽分ヲ含メリ(然レハ余ハ決シテ之レノミヲ以テ製鹽ニ適セリトハ謂ハズ)即チ該沿岸諸州ノ製鹽ニ適スル一源因ナリ非耶」(P.340~P.341)

阿非利加洲 紙數三百餘頁

亞細亞洲 清國地理 紙數四百餘頁

亞細亞洲 韓國地理 紙數貳百餘頁

亞細亞洲 { 薩領亞細亞西亞細
亞中央亞細亞其他 } 紙數三百餘頁

と記されている。(Bグループ)

「亞細亞洲」(㊥28)に掲載されている『高等地理總體目次』によると、

卷之一 歐羅巴洲

卷之二 阿非利加洲

卷之三 亞細亞洲(上)

卷之四 亞細亞洲(下)

卷之五 亞米利加洲
太平洋

と記されている。(Cグループ)

このように「高等地理シリーズ」はA, B, Cの3グループに大別され、他書の総体目次、奥付裏広告もこれに準じている。ここに掲載された図書の全てに筆者は当たっていないので、このうち全てが実際に出版されている図書であるかどうかという確証はない。また、A～C間の関係も定かではない。「亞細亞洲」(㊥30)の序言中では次のように記されてる。

此ノ高等地理ニ於テ、歐羅巴ニ四百六十五頁、阿非利加ニ三百四頁ヲ費セン筆ヲ移セバ、
宜シク千餘頁ヲ要ス可キナリ、然ルヲ九百四十四頁ヲ以テ其局ヲ結ベルヲ以テ、(後略)
(P. 3)

しかし、「亞細亞洲」は著作目録(P. 32)のように340頁である。おそらく広告から推察すると、冠称『亞細亞』の付してある図書の総計が900余頁なので、この図書を示すのであろう。

㊥25-A 高等地理 歐羅巴洲之部

本書の『再版序言』(明治36年11月執筆)(著作目録 P. 30)の中で、矢津が『世界ノ日本ナリ』と述べていることは当時の日本の国勢(情)を如実に表現し、矢津の地理学観を説明する一つの手掛りとなるであろう。なお、内村鑑三著『地人論』の『第二版に附する自序』(明治29年11月執筆)と比較すると、内村と矢津の思想の相違点があきらかになり、興味深い。

㊥27 高等地理 清國地誌

本書に付されている『高等地理總目次』には本書名は記載されていない。(Aグループと同様。)しかし、本書の標題紙の書名には冠称『高等地理』の名が記されている。また、Bグループの広告には「清国地理」の名が掲載されている。

㊥29 世界物産地誌

共著者の杉浦隆次、樺島駒次は東京高等師範学校地理歴史専修科の明治38年3月の卒業生で

角田政治著

隆文館 大正七年十月十八日十二版^{注1} 菊判

定価金四圓 <早大図>

914P., 108P.

注1：奥付によると初版は『大正五年三月八日發行』。

⑩19 朝鮮西伯利紀行

本書は明治二十六年に朝鮮、シベリア方面を旅行した際の記録である。この旅行について矢津は本文中の『余が今回の遊意』で次のように述べている。

余素と外遊の志あり、然れども、先づ此等、東洋各國に遊び、其實況を目撃し、而して漸次、西部に及ぼさんとは、又是れ宿志なりき、明治二十六年、偶々夏期休暇を得たり、是に於て、先づ朝鮮に渡り、其人情風物を探り、次で魯領浦鹽斯德に航して、西伯利に遊ぶ事に決し、旅装勿々單身飄然として、茲に外遊第一着の途に、上るに至れり（P. 2）

なお、旅費、行程、旅行上の注意事項も付記されている。

⑩20 萬國地誌 上卷, ⑩20-B 萬國地誌 中卷, ⑩20-D 萬國地誌 下卷

本書に記されている世界地誌の学習順序を見てみよう。

アジア→ヨーロッパ→アフリカ→北アメリカ→南アメリカ→大洋洲及オーストラリア（オセフィア）。

中地理學（⑩9-D～G）と比較せよ。

⑩23 新撰外國地理

⑩24の広告によると、『新撰外國地圖 全一冊 近刊』の記事があり、本書の付属の地理（帳）が存在するかもしれない。また、同広告によると⑩23は文部省検定済の教科書である。

⑩25 高等地理 歐羅巴洲之部, ⑩28 高等地理 亞細亞洲, ⑩30 高等地理 南亞米利加洲

「高等地理シリーズ」の各々の他書との関連をみてみよう。

「歐羅巴洲之部」（⑩25）に掲載されている『高等地理總體目次』によると、

卷之一 歐羅巴洲

卷之二 阿非利加洲

卷之三 亞細亞洲

卷之四 亞米利加洲

卷之五 大洋洲

と記されている。（Aグループ）

「高等地理 南亞米利加洲」の奥付裏広告によると、

歐羅巴洲 紙數五百餘頁

㊦55の(2) に対しての矢津の反論。

「凡北東貿易風ノ限界ハ決シテ四季一定セルモノニアラズ海水低温ノ時ハ北緯二十六度邊マデ退縮スレモ海水高温ノ時ニハ或ハ北緯三十五度若クハ迤北ニモ及フコトアリ」(P.341)と述べ、「日本海沿岸ニハ此ノ期節次キ流行ル北西ノ冷風アレバ氣候風之ト衝突スルヲ以テ該地方ニモ同シク梅雨ヲ感スルナリ」(P.341)と反論する。

㊦55の(3) に対しての矢津の反論。

高度は地質局出版の地形詳図、地形要報に依るとし、引用の根拠を矢津は示す。

本稿は『批評』の部に収録。

㊦42 白山之記

白山及び周辺地域の地理及び地質(形)の解説。論文末に地図(白山見取地図、越前阪井港海面ヨリ白山奥ノ院ニ至ル截断面ヲ示セル図)を付す。

本稿は『論説』の部に収録。

㊦43 熊本の地震

地震と他の自然現象との相互関係について次のように矢津は観察する。

(1)「地震は氣壓力の強き時に多く(後略)」(2-16, P.177)

(2)「[地震は]而して温度の平均以上ある時よりも却て平均以下にある時に多く況んや最も多きは零度より五度に至る寒冷の期にありて温暖期にはあらざるなり」(2-16, P.178)

以上のような一般的関係を導く。明治22年7月から23年3月までに熊本に於て発生した地震の観測結果(発生時、性質、強弱、方向、気圧、温度、天気等)を表示する。この表より地震が降雨中若くは降雨後に多く発生していることに注目している。(この点に関して論文末に編者による反論が掲載されている。2-17, P.224)

本稿は『論説』の部に収録。

㊦44 最近に於ける熊本地震

明治23年3月24日から同年5月31日までの熊本地震の観測結果およびその時の気圧(一日中平均)、雨量「一日中合計」を示し、その間の関係を論じる。結論として、「地震の原因の如きは將來の論定に屬すべきものふして未だ今日の知識にては論定すべき充分なる理屈を發見し得ざればなり……」(P.265)と述べる。

本稿は『論説』の部に収録。

㊦45 邦國の位置(政治地理一節)

「世界の各部に於て社會の發達に程度あるものハ第一因として位置を擧げざるべからず」(P.323)と述べ、上古世界の開明は北緯20°~35°圏内、中古世界では北緯35°~45°、現世紀では北緯45°~55°緯圏内にあり、世界の開化は北漸することを矢津は主張。併せ、各圏内の気温に関しても論じている。日本の位置は北緯24°06'~50°56'であるが、気温が緯度に相對して、寒冷であるので、現今の開化に適する同温線内にあると記す。更に、「國際上に關する我邦の位置」

をも説明し、日本が英国に似ていることを指摘し、「東岸には最新發達の地位を占むる米國大陸あり將來之を利用せば我發達は將に測る可らざるものあらん我帝国の位置ハ實に多幸多望の間に立つものと謂つべきなり。」(P.326)と結ぶ。日清戦争以前、つまり国力にあまり自信のない時期に日本の位置(国土)を地理上から研究し、望みある将来性(優秀性)を説明している点は注目に値する。

本稿は『論説』の部に収録され、「^{日本}帝國政治地理」(㊥3 P.12~18)に転載されている。(但し、㊥3のP.17~18と「位置ニ於ル文明ノ配布圖」は本稿には転載されていない。)

㊥46 中學地文學の批評に就き零丁學士に答ふ

本稿は㊥64の批評に対する回答である。

矢津は㊥64の(1)に関しては、「著者〔矢津〕は必ずしもゲー氏〔Geikie, A〕と一致するを勉めし譯にも無之候」(P.97)と反論し、更に用語の使用法について矢津の見解を述る。(2)~(7)に関しては、ほぼ零丁學士の意見を受け入れている。なお、批評者『零丁學士』は小川琢治のこと。⁹⁾

本稿は『雜録』の部に収録。

㊥47 地文學の定義に就きて

零丁學士が㊥46の矢津の回答(1)に関し再び批判を㊥65で行ったので、矢津より再度、反論が本稿に於てなされる。

㊥65の(1)に対しては、『有機物』という術語の成立を述べ、「一意義を現はすの外、活法なきか如く謂へるは、偏狹の見解と謂はざるべからず」(P.216)と反論している。

㊥65の(2)に対しては、「然れども地球を以て、生氣なく亦活動なきものとは、誰も亦之を言ふこと氣はさるべし、・・・」(P.217)と反論している。

本稿は『雜録』の部に収録。

なお、地文學の定義に関する矢津・零丁學士の論争に関連して、岩崎重二が「地文學と地理學と地質學との關係を論ず」を地学雜誌(第10卷113号 明治31年5月15日 P.269~272)に掲載している。

㊥48 ㊥政治地理研究の方面

政治地理は Political Geography の直訳であるが、「是れ全く此學科の意を悉くしたるものにあらず」(P.4)とし、人文地理、人事地理、邦制地理、国家地理等の名前が意味している内容と同じであると矢津は述べる。結論としては次のように述べている。「政治地理の範圍及任務の要領を約言すれば(一)政治地理は地理的事情に支配せらるゝ國家の變遷發達(二)各様の地理に圍繞せらるゝ人類の品類習俗(三)生業產物の配置を究め(四)移住地の指定、通路の撰定、國防線の成定等を講ずるにあり、而して地球を以て人類の社會又は國家とし、某表面に於ける天然の狀態は、人類を圍める風土的境遇にして、吾人は其中心たり、根本たりとして、講究せざるべからず。」(P.10)

④49 北日本と南日本

日本を富士帯を中心に北日本（関東）と南日本（関西）に二分して、各々の地域について述べる。歴史上、人文の発達上、富の程度・生業の程度について、その差異を論じる。結論として次のように記す。「要するに、南日本の凡て守舊的にして、北日本の進取的なる結果に販せざるべからず。」（P.10）とし、「北日本は日本の新野にして火山岩多く土壌比較的に瘠薄に、加ふるに氣候大概寒くして農耕に利あらず、故に舊套を固守して、只管富を穀産に仰がば、我國の貧地たらんのみ。然るに食蠶製糸と云へる一大生業を覚め、・・・」（P.10）と述べている。

なお、志賀重昂にも「北日本と南日本」＜地理学 志賀重昂全集 第四巻＞P.311～322の記事がある。¹⁰⁾

④50 世界の巨船「ミ子ソタ」號

米国の巨船「ミネソタ」号の概要。本誌「會報」は東京高等師範學校地理歴史會の会誌であり、東京教育大学附属図書館では、第1号のみを所蔵。（本誌の改題、廃刊等については未調査）

④52 日本之雪

本稿の構成は次の通りである。（筆者作成）

（1）深雪地方 （2）深雪地の雪量日本の最深雪地—白峰村（旧牛首郷） （4）日本の深雪線 （5）雪の効用 （6）雪の美観

（3）（4）は④42に内容を既述の部分がある。

本稿は『地理教授資料』の部に収録。

④54 矢津氏編纂日本地文學

矢津の略歴及び「日本地文學」の成立事情を述べ、次に「日本地文學」に収録されている小藤著の序文と同じものを掲載している。

本稿は『批評』の部に収録。

④55 矢津昌永日本地文學＝就テ

頓野は疑問点として以下の3点を指適する。

（1）矢津が「日本地文學」の第二編第八章中の「瀬戸内海岸の寡雨」（81丁～82丁）の項に於て、「故＝瀬戸内海ハ雨水ノ混入少クシテ恰モ自然ノ大蒸鹽罐ノ如ク鹽分尤濃厚ニシテ製鹽ニ適セリ」（81丁～82丁）と記しているが、頓野は「海水が澤山に鹽分を含んで居るから製鹽に適する云々の點はちと不審です」と疑問を投げかけている。瀬戸内海沿岸が製塩に適している理由として別の条件を挙げて説明を行う。

（2）梅雨の原因を矢津は「印度洋邊から來る西南季候風 monson と貿易風とが日本の上で打ち合から此霖雨を起す」（頓野要約P.285）と述べているが、これに対して頓野は「著者が貿易風と西南季候風と切り合ふからとの説明はと解し悪くいかと想はれます。なぜなれば日本には貿易風が及びませんからです。」（P.285）と反論する。また、東北風を矢津が『貿易風』

と誤認したのであろうと指摘する。

(3) 第三編第十四章山岳の部(217丁～249丁)中の山の高度が精確ではないと述べている。

論文末にペンネームX.Y.より、「日本地文學」に於ては引用書名を明記してない不備を指摘されている。

本稿は『批評』の部に収録。

㊤56 矢津氏地文學に就て

石井は「日本地文學」に関していくつかの疑問点を挙げる。

(1) 「日本地文學」中の「我日本ノ中部ヲ横ギル北緯三十五度ト交叉スル經度ノ廣サハ二十三里三町餘トス」(19丁)の記事について、これは「北緯〔緯の誤り〕三十五度即ち日本の中部に於て經度の長さ云々」(P.95)との表現が適切であろうと石井は述べている。

(2) 露の節(61丁～62丁)中に使用されている『デューポイント』の訳語としての『結露點』の定義が不明確であると石井は指摘する。また、水蒸気が露滴になるまでの過程の説明が確かではないと見なしている。

(3) 「晝夜長短ノ別アリ或ハ四時變更ノ別アルハ何ゾヤ是レ他ナシ地軸ハ軌道ト角度並行ヲナサズシテ殆ド六十六度三十分ノ角度ヲナシ・・・」(11丁)と「然ルニ地軸ハ幸ニ軌道ト六十六度三十分ノ角度ヲナスガ故ニ吾人が感觸スル如ク春夏秋冬ノ別アリ」(13丁)の二句の説明は理解しずらく、これは「晝夜長短四季變化の原因は地軸と軌道面即ちプレーンオフオルビットと直角或は平行ならすして且つ地軸の方向常に殆ど平行する故にある」(P.96)との内容ではないかと石井は述べている。

その他、経緯度論中の縦横の語、反射と屈折の誤用等について意見を示す。

本稿は『批評』の部に収録。

㊤57 亞細亞地理書の新著

「亞細亞地理」(㊤18)の書評で、亞細亞之地質(P.9～18)の記述の部分に関しては賛成しがたいと評者は述べている。

㊤58 矢津氏の日本政治地理

本稿の標題は「矢津氏の日本政治地理」と記されているが、「日本政治地理」(㊤3)の書評であり、「日本政治地理」(㊤10)の書評ではない。

評者は「矢津氏の『政治地理』が大體に至りては此の如し、讚嘆すべきものあり・・・」(P.20)と述べ、次に遺憾とする点を列挙している。例えば、矢津は印度の滅亡の原因を簡略に見すぎている点等、かなり専門的に批判している。しかし、結論としては本書を賞讃し、「是れ大醇中の小醜、幾勺の小醜素より此書の大醇を傷ふに足らざるなり」(P.33)と評者は記している。

本稿が記るされた当時〔明治26年〕の地理学界に於て、矢津が東京帝国大学出身者ではな

く、一介の地方の教員として本書を上梓した事実はかなりユニークであった様子である。評者は次のように述べている。「今や學閥は藩閥の破懷に連れて亦た破懷されんとす、諸士にして發憤勵精せば、優に大名を成すに足らん。(中略)特に地理學の如きは地方こそ最も研究材料の饒多なる處、諸子何そ奮ひて此間に一頭角を迫出せざる、地理學は泰西に在りても未だ真成の理學と成らず、爲す有るへきの餘地は綽々として尙ほ存す」(P.32)

なお、本稿の執筆者名は明記されていないが中川浩一は、「志賀重昂と目される評者」と述べている。¹¹⁾ この点に関しては、筆者(源)も次の点から賛同する。第1に志賀の地理学に対する問題意識と同様なものが、㊦58の随所に見うけられる。例えば、「真成の地理學豈に意に此の如きものならんや、山河に因りて峙つ、……」(P.17)、「世界に於ける日本の位置如何」(P.18)¹²⁾等の記述が挙げられる。また、「亞細亞」の執筆者の一人として志賀の名前が挙げられている。以上2点から評者は志賀重昂といえよう。

㊦59 日本政治地理

猪間は本書に関して、現象を誇張せず理学的範囲を脱することなく記述されているとしている。しかし、人口の配布、宗教の普及等は説明不足と批判する。

㊦60 矢津氏著中學日本地誌に就て

記載事項の誤り、例えば、地名の読み方等、十数か所を指摘。

㊦61 「矢津氏の日本地文學」

「日本地文學」がシカゴの万国博覧会で受賞した旨の報告。

㊦62 矢津昌永氏著中學萬國地誌を読む

猪間は「先づ仕組の上より見れば今日に於ける最上乘の教科書と云ふに躊躇せざるなり但し多少の瑕瑾もあり少しく不感服の記事もあり……」(P.147~148)と述べ、不感服の点として7ヵ所を挙げている。

1. 地名の読み方。 2. 「地勢を説く所兎角物足らぬ心地す。」 3. 「朝鮮京城の緯度盛岡に同じとあり誤りなり」 4. 中国に関する記事の誤り。 5. 本書で使用している用語の誤り。 6. カナダに関する記事の誤り。 7. 「五大洲及び支那朝鮮の地圖を附しあれども本文と照應せず」。

㊦64 矢津昌永氏著中學地文學を読みて

零丁學士が深く遺憾とする所として以下の諸点を列挙する。

(1) 矢津氏の地文学の定義はゲーキー [Geikie] の書と比較し、支離滅裂に陥っている。

(2) 矢津は地球の形体を楕円形と述べているが、形体は楕円体ではないか。

(3) 矢津の始原界の説明に対して、評者は次のように述べている。「始原界の岩石に有用礦物を埋藏すること多しとし、其の原因を成生後の變動の激甚なりしに歸し、罅隙に金銀銅鐵寶石を蔵す(第四百四十七、八頁)といひて、其以後の岩石の富に及ばず、恰も本邦の金銀銅諸礦の多く新火山岩中に在るを忘れたるが如きは如何、……」(P.38)

(4) 洪積層の成立過程の記述が理解しがたい。

(5) 花岡岩の項に於て、熔岩と岩漿、噴出岩と火山岩を混同している。

(6) 火山岩の項については、評者は「新火山岩の噴出は地史上の大變動なるも、大變動を生じた新火山岩なりといふは不可なり」(P.40)と述べている。

(7) 地熱作用と火山力とを矢津は同一視しているが適當ではない。

本稿は『批評』の部に収録。

㊦65 矢津昌永氏中學地文學の地文學の定義を駁す

㊦64(批判)に対し㊦46で回答・反論が矢津によってなされたが、更に㊦46に対し、零丁學士が再批判を行う。論点としては次の2点。

(1) 矢津が地文學の定義中、使用している『有機物』なる造語は不適當である。

(2) 生物生活の現象と同じように、地球にも生活機能が存在するという考え方に対し評者は駁論する。

本稿は『雜錄』の部に収録。

㊦70 世界物產地誌 完〔書評〕

小林は本書中の次の5点について批判する。

(1) 「本書につき開卷先づ意外の觀あるは目次の不正亂雜なるに在り。」(P.721)例えば、農産物を食用農産物と工芸用農産物に大別しているが、これ以外の農産物はいかに分類するのか。

(2) 「多數者の合著なる故か説明統一せず且不權衡に陷る點多し。」(P.721)

(3) 「調査上周到なる注意を欠きし故か、参考書の涉獵少かりし故か、往々にして誰人も知り居るべく想像さるゝ點に於て誤りあるを見る。」(P.721)例えば、日本の製塩は悉く海塩であるにもかかわらず、「大部は海鹽にして」と記している点等を小林は挙げる。

(4) 「本書中最も信ずべからざるものは統計に在りと……」(P.722)とし、わが国の金産地の表等を例示し、指摘を行う。

(5) 「必ず地誌的著書と信じ、此點に於て最も正確なるべしと思考したり、然るに吾人の豫想は之に反したるを悲しむ。」(P.722)例えば、「北米歐州諸國及び我國の寒温地方」中の記事に於て、「日本に寒帶ありや」と評者は批判する。

本稿は『雜報』の部に収録。

㊦71 世界物產地誌に對する小林房太郎氏の批評に就きて

「世界物產地誌」に関する批判(㊦70)へ本書の共著者の1人である杉浦隆次によって反論がなされる。

㊦70でなされた批判の順番にそって記述してみる。

(1) に対して、杉浦は次のように反論している。「世界幾百萬種の物産を果して然かく合理的に適切なる人爲分類を下し得べきか、又農産物を食用及工藝用の二とせしが此以外の農産物とは何ぞ、ヨシありとするも其世界經濟上の地位は果して如何、(後略)」(P.784)

(2) に対しても (1) 同様と記す。

(3) に対して、杉浦は「先づ本邦製鹽の條下『大部分は海鹽にして』を指適す、字義に拘泥するも甚しからずや。」と述べ、以下反論を続ける。

(4) に対して、「僅に此一例を以て本書全卷を抹殺し去らんとするか、予輩共の何の爲めにする所あるかを解するに苦しむ」(P. 875)と述べている。

(5) に対しては、地理的著書として不適當として例示されている「日本に寒帶ありや」に関し、杉浦は「本條予輩は寒温地方といひ帶の一字を附せしとなし、縱令、之ありとするも常識上讀者は氷解に難せざる可し。」(P. 875)と反駁している。

本稿末に『附言』として小林からの短文が付記されている。

本稿は『雜報』の部に収録。

㊦72 矢津昌永氏の「日本政治地理」について

矢津の「^{日本}_{帝國}政治地理」について阿部は次のように述べている。

わが國に於る政治地理學に關する研究が何時頃から始まったかは審かではないが、恐らく明治二十四、五年頃にその初版を出し、その後數回版を重ねて世間に續々と需要せられたといはれる元高等師範學校教授矢津昌永氏の『日本帝國政治地理』がわが國に於る政治地理學、特に日本政治地理學に關する文献の最初のものであらうと思はれる。(P. 113)

また、「日本政治地理」についても、「此本はその當時に於ける唯一の政治地理學に關する文献であつた。」(P. 114)と記し、矢津はわが國の政治地理学の先驅者である旨を述べている。更に、「日本政治地理」の目次と阿部の日本政治地理学の私案を比較記載している。

第四章 矢津昌永の生涯

これ迄のわが國の地理学界では矢津昌永に関する伝記的研究・調査はほとんど無いといつてよい状態であつた。僅かに存在する伝記の記事にも誤りやその誤りの孫引等が多く見うけられ、研究資料としては信頼できない。¹³⁾従つて、彼の生涯を記述するためにはまず根本資料から調査し直し、史実ひとつひとつを確認しなければならなかつた。その際、現時点でできる限り入手可能な資料を活用し、さらに遺族の方からインタビューによって情報を収集したが、なお未確認部分が多数ある。本稿ではその部分は未確認の旨を記した。この点に関しては今後の研究に待つこととしたい。

本章を記述する際に、主として利用した基礎資料は次の通りである。(『 』内は本稿で使用する時の略記号。)

- 1 東京高等師範學校舊職員履歷書 「ハーワ」(明治三十五年四月一日東京高等師範學校

ト改稱)『師範履』:東京教育大学蔵

2 (第五高等中学校在職時の履歴書)『五高履』:熊本大学法文学部蔵

3 (東京専門学校から文部省へ提出した書類の中にある矢津の履歴書の写し)『東京履』:
早稲田大学大学史編集所蔵

本章の全体の構成は次の通りである。

A 生い立ち・青年時代

B (東京) 高等師範学校在任時代・晩年

C 資料

なお、本稿中の矢津の年齢は数え年で示す。

(A) 生い立ち・青年時代

本節では地理学者として後日、大成した矢津の学問的素養の成立過程とその環境を解明することに重点を置いて記述する。

矢津昌永は文久3年10月13日(1863)¹⁴⁾、肥後熊本千反畑町で生れた。矢津家の先祖を見ると中興の祖として、『吉江頼母』の名が見うけられ、その子源右衛門以後、細川家に家臣として仕えたようである。吉江頼母から数えて十代目が昌永であり、昌親、美志の長男として誕生し、兄弟には他に妹2人がいた。昌永は幼名を英之助、後に英記、更に昌永と改名。城水、白英とも号した。

教育歴をみると、明治3年3月に熊本藩士、時習館習書師¹⁵⁾内田澱江の私塾に8歳で入門し、漢学(習字)を学んだ。(「五高履」による。「師範履」では入門年月を明治4年3月としている。)

明治7年10月1日、熊本にある安養院共立私塾に入門し、漢学、算術、習字を学んだ。(「五高履」による。更に、この次に「同九年二月十日 白川縣草葉學校等ニ於テ三年間小學普通科修業」の記述がある。「師範履」では「明治7年〔内田澱江塾〕退塾 明治8年8月安養院塾ニ入り普通學ヲ修ム」と記されている。)

明治10年(丁丑)2月18日、西南の役による兵火により、安養院塾が廃塾となった。(「師範履」) また、矢津家も西南の役により焼失した様子である。筆者はこの2月18日の日付については疑問をもつ。「熊本県史」¹⁶⁾によると次のように記してある。「2月19日午前11時40分、城内本丸のこの天守閣附近から空然原因不明の火が起り、…」(「近代編第一」P.290)とし、城内の出火が坪井寒林の民家迄延焼した旨を記している点から推測すると、18日と記入されている日付は多少後日にずれるのではなかろうか。但し、この火事の原因を「師範履」は兵火と記しているので天守閣炎上による火災の延焼とは異なる事件によるのかもしれないという疑問が残る。明治8年から明治12年迄の期間に於て矢津の教育歴が「五高履」と「師範履」との間で相違が生じた点について筆者は次のように推測する。西南の役によって明治10年2月以降、熊本市内は戦場化し民家は焼き尽されている。また、熊本県内の教育施設についてみると、「明治十年の役は本縣の教育に非常な打撃を與へた。七、八、九年と急速に普及發達した小學教育

が戦乱の爲めに一時全部閉校するといふ惨害を被た。」¹⁷⁾と記されている。従って、矢津は明治10年2月迄安養院塾で学び、兵火により塾が焼け、廃塾となった為に、以後、12年9月師範学校に入学する迄の期間、白川縣草葉學校、千草學校等で2～3年間学んだものではなかろうか。

明治12年9月1日、熊本県師範学校〔当時の名称は熊本師範學校〕¹⁸⁾に入学した。(「五高履」による。「師範履」では7月30日。)当時の入校規則によると生徒は年齢18年以上35年以下と定められているが¹⁹⁾、矢津は当時、17歳であった。師範学校に於て2ヵ年間学び14年7月27日、小学師範学科全科卒業。²⁰⁾(「師範履」)この師範学校在校中に関しては、「五高履」の12年9月1日の項目の次に、「同年十月廿日 大坪金弼ニ就地理詩文學修業、藏田某ニ就二年間英學修業」と記載されている。大坪全弼について調査してみると、当時の師範学校の職員表に氏名を見出すことができる。

職員表 (12年3月現在)²¹⁾

(職名) 監事 (本籍) 廣島縣士族 (備考) 十二年二月監事ニテ教授方兼務拜命
また、学科課程 (11年)²²⁾

(學科) 地學 (第四級) 日本地誌要略 (第三級) 與地誌略

(第四、三級は一年目の学年。)

大坪に就き地理(地学)を学習したのであろう。一方、藏田については師範学校の職員表には記載されていない。「東京履」によると、「明治十三年三月 金峰義塾ニ入り英語學修業」の旨が記されていることと、「肥後先哲偉蹟後篇」²³⁾にも「十二年九月熊本師範學校に入る、傍ら金峰義塾に英語を學び、最も地理書を耽讀し、少閑あれば地圖を繙くを以て無上の樂とせり、蓋し先生が他日地理學の大家たる既に此時萌芽を發せりと謂ふべし、(後略)」(P.749)と記されていることから、藏田は金峰義塾の師であり、矢津はそこで英学を修めたのであろう。また当時(13年)、熊本新聞に政党論という一文を矢津が投稿した事が「肥後先哲偉編後篇」(P.749)に記されているが、この投稿については筆者は未調査である。

明治14年9月19歳の時、熊本県重味小学校²⁴⁾に二等訓導として就任して教鞭を執り、教育者としてのスタートをきった。(師範履)26年7月20日、同小学校を退職した。(「師範履」による。五高履では17年7月30日)重味小学校退職後、熊本県益城郡木山小学校に転任(「肥後先哲偉蹟後篇」P.750)したらしいが、「師範履」、「五高履」共にこれにはまったくふれていない。

当時の矢津家の状態を大川英子氏(昌永の六女)にインタビューして採録したものが次の聞き書である。(大川氏が親より聞いた話を記憶していた。昭和52年11月16日採録。)[「お婆さん〔美志〕はやかましい人だったようですが、判った人でもあったようです。おじいさん〔昌親〕の方は、こんな世の中は嫌だと言って大黒柱に寄りかかっていたそうです。〔矢津家では〕武士の商法で小間物屋さんかなにかを始めたが、店の材料が〔仕入れをしないので〕段々、減っ

ていってしまった。仕入れる事ができなく、売っては食べてしまったのです。父〔昌永〕が寒い時期に、どこからか帰ってくると、お婆さんが吹子で火をおこそうとしたが、歯が抜けていて空気がもれ、火がおこらなかった。これを父が見ていて、こんな事では矢津の^{うち}家が駄目になると思い、自分が発展しなければいけないと思ったそうです。また、〔お婆さんが昌永を〕東京に出してくれると言ったので、東京に出てきたらしい。」

上述のように、矢津家は西南の役以後、武士の商法等でかなり貧しい生活をしていた様子である。矢津は小学校教員の資格を有していたが、中学校教員の資格は持っていなかった。当時、中学校教員資格を取得する為には大学を卒業するか、または、東京師範学校の中学師範学科を卒業するかに限られていた。これらの方法以外で中学校教員を志願する者に対して、文部省は明治17年8月、『中學校師範學校教員免許規程』を制定し、検定試験による新しい道を開いた²⁶⁾。これは各学科毎に授業法に併せて学力の検定を実施し、他に品行についても検定した。18年3月、文部省はこの規定による第1回学力検定試験を施行し、矢津はこれを受験して修身科・地理科・習字科の免許状を取得した。なお、矢津以外の合格者で地理関係者名をみると、野口保興（「中學校、師範學科」）、その他数名を見出すことができる²⁶⁾。

明治18年9月、山梨県富士山下一桜小学校、ついで東京常盤小学校に奉職した旨が「肥後先哲偉蹟後篇」（P.751）に記るされているが、「師範履」、「五高履」共にこの件に関しては記載していない。

明治19年4月、24歳の時、福井県〔尋常〕師範学校三等教諭に任ぜられ、同9月、福井県〔尋常〕中学校へ三等教諭として転じ、22年10月迄奉職した。（「五高履」、「師範履」共に）この中学校在位中に、「日本地文學」（22年、27歳の時）を上梓した。学校に於ては、寄宿舎監督兼務を命ぜられた。この時期について、「五高履」では19年11月、「師範履」では20年11月と記るされている。20年4月1日、三等教諭から助教諭に昇格した。（「五高履」）21年6月、付属測候所主任を嘱託された。（「五高履」）上述のように22年10月で本校を辞めて第五高等中学校へ移った。

明治22年11月、「地理科教授及ヒ書器掛ノ事務取扱ヲ向ニヵ月間嘱托シ爲報酬一ヵ月貳拾五圓贈與」と「五高履」に記され、続いて11月13日、27歳の時、第五高等中学校助教授に任ぜられた。（「師範履」では12月1日。）ここで第五高等中学校について簡単にみておこう。19年に『中學校令』が制定され、全国を五区に分けて各区に一校ずつ高等中学校を設置することが定められた。九州七県は第五区に属し、この地区に於ては熊本に設置することが20年5月30日に決定された。矢津は創立後、2年目の本校に福井県尋常中学校から、転じて、27年迄勤務している。在任中の学校長名及び在職期間は次の通りである²⁷⁾。

(氏 名)	(役 職)	(在職期間)
西村 貞	(学校長 ^{事務取扱})	22年9月～23年2月
平山 太郎	(学 校 長)	23年2月～24年6月

桜井 房記	(学校長心得)	24年 6 月
嘉納治五郎	(学校長兼文 部省参事官)	24年 6 月～26年 1 月
中川 元	(学 校 長)	26年 1 月～33年 4 月

明治25年7月, 第1回卒業式が行なわれ, 卒業生は14人であった。その内には『佐藤傳蔵』²⁸⁾の名前が挙げられているが, 矢津との関係は不明である。なお, 24年10月15日, 本校の官制の改正により『助教諭』は『助教授』に名称変更がなされた。('五高履', '師範履' 共に名称変更については記載している。)

第五高等中学校在任中の地理学に於る業績としては, 明治26年7月1日に「日本 政治地理」を上梓している。この年, 朝鮮, シベリア方面に初めての海外旅行を試み, 27年1月13日に「朝鮮西伯利紀行」を刊行した。また, 先年, 著述した「日本地文學」に対して, 26年シカゴ府に於て開催されたコロンブス世界博覧会で賞牌賞状が贈與された。(現在, この賞牌は大川英子氏が所蔵されている。)

(B) (東京) 高等師範学校在任時代・晩年

本節では明治27年から晩年までを勤務先である(東京)高等師範学校と東京専門学校に大別し, 地理教育活動を中心に記述した。

(a) (東京) 高等師範学校

ここで使用する年月日はとくに断りのない限り, 「師範履」による。

明治27年4月25日, 32歳の時文部省から第五高等中学校より高等師範学校助教諭に任ぜられた。この時, 矢津が第五高等中学校に在任時の学校長であった嘉納治五郎が高等師範の校長を命ぜられている。矢津と嘉納との関係は未調査であるが, 「肥後先哲偉蹟後篇」によると, 「傳へ聞く嘉納高等師範學校長は特に先生を我國に於ける地理教授の第一人者なりと推奨せしと云ふ,」(P.753)と記されている。(なお, 28年3月には「中日本地誌」を刊行している。)

当時の高等師範は日清戦争以後, 小学校を始めとして中学校, 高等女学校等の増設が盛んになり, 教員の需要が増加したために, その対策として専修科を新設することになった。地理歴史の専修科(『地理歴史科』)は29年9月に設置された²⁹⁾。このような状況のもとで矢津は高等師範に於て学生を指導していた。中川はこの地理歴史専修科についてその性格を次のように述べている。

高等教育の段階において地理学が専攻の対象となり, 学生が募集された最初の機会である³⁰⁾。

明治30年7月, 高等師範を辞め, 付属尋常中学校地理科講師を嘱託された。翌31年9月には高等師範学校研究科に入学して, 教育学及び教授法を研究している。32年12月, 研究を完了して退学した。この研究科については次のように記されている。「明治三十四年三月 始めて研

究科卒業生二十八名を出す。三十二年改正の本校規程に於て、始めて研究科の制を定め、官費生は本科及び専修科卒業生中より、校長之を選抜し文部大臣の許可を経て入學せしめ、私費生は多年教職に従事し相當の學識經驗ある者を入學せしめた。先に明治二十九年・三十二年・三十三年に一二人の研究科卒業生ありたれど正規の規程ありしにあらず・・・」³¹⁾ 従って、矢津が入学した研究科は臨時試行的な性格のものようである。

助教諭のポストを辞めてまでも、一学生として研究科に入学した動機ははっきりしないが、最終学歴が『熊本師範学校卒』であったからではなかろうか。明治30年頃は後述するように、地理学界の主流が東京、京都帝国大学というアカデミズムによって占められてはいなかったが、少しずつその傾向が見られ、彼は両大学の出身者でない為の辛苦を経験したからかもしれない。矢津は帝国大学出身でないことに相当、人生、学問上で劣等感を持っていたようである。この事が彼の地理学者としての方向を決定したひとつの要因といえるのではないかと筆者は推察する。(大川英子氏よりの採録であるが、「父が大学を出ていないことを非常に残念がっていたことを母〔節〕より聞いてます。」と語られていることも付記しておく。) なお、「肥後先哲偉蹟後篇」(P.752)によると、研究科に入学した頃、外国語学校でドイツ語を学んでいたと記されているが、この点に関しては未調査である。また、文部省令により、31年4月には文科内に『地理歴史部』が設置される³²⁾。地理歴史部について石田は次のように述べている。

ここに地誌を主とする学校地理の教育の型が形成され、これが明治末、両帝大の地理学講座の創設される前までの、わが国地理学の最高の教育機関であり、また最多数の修学者を輩出したものであった³³⁾。

明治33年4月17日、高等師範学校地理科講師を兼嘱され、同年8月17日、同教授に任ぜられた。37年9月24日、陸軍教授に任ぜられ、東京高等師範教授と兼任した。(高等師範学校は広島に新しく広島高等師範学校が設置されたので、35年3月、『東京高等師範學校』と名称を変更。) 42年9月10日、48歳の時、東京高等師範学校を退職。陸軍教授としての地位は継続している。(陸軍教授を退職した時期については未調査。但し、大正6年14日付の宮内省による観桜会の招待状〔及川芳枝氏蔵〕には、『陸軍教授 矢津昌永』と記載されているので、この時点までは退職していないことが立証できる。)

次に(東京)高等師範学校時代、地理学・地理教育に関して果たした矢津の役割と彼の占める位置について検討してみよう。彼はこの時期に中(等)学校向きの教科書並びに参考書を多数出版し、中等地理教育界では重鎮であった。(著作目録を参照。)高等師範学校の「創立60年史」の地理科の部分を見ると、「山崎直方及び大関久五郎によって地理教授の新生面が開かれ、次いで田中啓爾、内田寛一・・・」(P.210)と記るされ、明治35年頃では矢津は大関、山崎³⁴⁾並んで同校の教授であるにも拘らず、矢津の名前が挙られていない。その理由については、中

川は断定を避け、論証をする段階に迄達していないと断わって次のように述べている。

明治30年代の後半から、日本の地理学の主流は、在野の人々が営々としてきづきあげてきたものから、象牙の塔の住人の手へと急速に移っていく。山崎直方の帰朝と東京高等師範学校教授への就任は、結果的には独学力行、立志伝中の人物としての矢津昌永を私学へと追いやる結果を招来する⁸⁵⁾。

「創立60年史」と中川の以上の記述は高等師範に於ける矢津の地位と同時に、また明治30年代の地理教育の現状を表現しているのではなかろうか。

(b) 東京専門学校(早稲田大学)

矢津は高等師範に勤務した時点より多少遅れて、東京専門学校に兼務した。早稲田大学(東京専門学校の後身)には当時の学報、その他の根本史料が保存されているので、それらの史料に基づいてこの点を記述をしてみよう。

明治33年2月27日、東京専門学校は文部省に対して「本校文學部講師トシテ矢津昌永ヲ囑托シ至急始業致度候ニ付・・・」(「明治卅貳年ヨリ全卅六年ニ至ル 文部省関係書類」)の旨の採用人事に関する届出を提出し、また、同時に矢津自身も「教員認可願」、「履歴書」(「東京履」)を添付。この届出に対して、文部大臣 伯爵 樺山資紀の名で、「私立東京専門学校地理學科教員タルコトヲ認可ス 明治三十三年三月七日」と回答がある。この点から推察すると、少なくとも33年3月以前から講師(地理学)として勤務していたことが判明する。

講師としての受持講義時間数は次の通りである。

毎週受持時間数 2時間 就職年月 明治三十三年二月 但し、無報酬である。(「明治三十二年十二月二十一日差出教員姓名資格書」P.217)

次に、東京専門学校の広報誌である「早稲田學報」から矢津に関する記事を抜いてみよう。

1) 第37號 明治33年3月25日 P.71

◎講師増聘 左の二師を新に囑托す

一 地理學(地文學) 矢津昌永 (後略)

(学報の巻号、発行年月日、記載頁はアラビア数字に統一)

2) 第55號 明治34年7月15日 P.57

(東京専門學校 規則一覽)

文學部 講師 矢津昌永

3) 第74號 明治35年9月25日 P.467

講師招待宴會

例年に倣ひ學業始めに本校講師を招待せるが、本年は九月十五日始業せるを以て十三日午後四時芝紅葉館・・・

來會者左の如し。

矢津昌永（他略）

4) 第91號 明治36年9月25日 P.693～694

講師招待會（中略）

矢津昌永（他略）

以上の史料から東京専門学校文学部講師として、少なくとも明治33年3月から35年9月までの期間勤務していたことが判明する。『東京専門学校』は35年10月『早稲田大學（大學部・専門部・高等豫科・研究科）』と改称された。

次に早稲田大学の開校に伴う、矢津の教授上の変化を並べてみたい。

初出史料の記事より順次記載してみる。

1) 「早稲田大學開校 東京専門学校創立廿年 紀念録」（明治三十六年六月發行）

例言「記事は總べて明治三十五年十二月現在とす。」（P.3）と記し、本書中の早稲田大学の現況を解説した項では、「早稲田大學の講師は左の如し、（イロハ順）」（P.156～159）として、『矢津昌永』（P.157）の名前が記載されている。しかし、「第廿一回 皇明治三十五年九月
至明治三十六年八月 早稲田大學報告」の講師及受持課目中には名前を見出すことができなかった。（「早稲田學報臨時増刊第七十七號 早稲田大學校友會誌 第十七回報告及名簿」明治三十五年十二月二十日發行この中の職員之部に矢津昌永の名前を見出す。）この点に関して筆者はこれ以上調査はしなかった。また、「第廿二回 皇明治三十六年九月
至明治三十七年八月 早稲田大學報告」から「第廿六回 皇明治四十年九月
至明治四十一年八月 早稲田大學報告」までの講義担当者中には見出すことはできなかった。なお、第廿五回早稲田大學報告は出版されず、「廿五年紀念 早稲田大學創業録」が代りに発行されたが、この中には講義担当科目は記載されていない。講義担当科目関係の資料を追ってみよう。

2) 第廿七回 皇明治四十一年九月
至明治四十二年八月 早稲田大學報告 P.22（高等師範部）

一 地理學 矢津昌永

（「第廿六 皇明治四十年九月
至明治四十一年八月 早稲田大學報告」（P.24）では高等師範部の地理学担当者は志賀重昂。なお、「第廿七回」にも志賀は担当している。）

講師担任課目表は「第廿七回」迄は「大學報告」に所載されていたが、「第廿八回」以降からは「大學報告」には記載されなくなる。この頃より「学科配当表」が印刷されている³⁶⁾。

3) 明治四十三年度 學科配當表〔明治42年9月～同43年8月〕³⁷⁾ P.14

大學部文學科史學科

（第一學年）日本地誌（時數）2 矢津

（第二學年）外國地誌（時數）2 矢津

（「明治四十二年度 學科配當表」の大學部文學科史學科の項をみると、『第一學年 日本地誌 2 吉田』と記載されている。）

4) 明治四十四年度 學科配當表〔明治43年9月～同44年8月〕 P.13

大學部文學科史學科

(第一學年) 日本地誌 2 矢津

(第二學年) 外國地誌 2 矢津

(第三學年) 外國地誌 2 矢津

5) 明治四十五年度 學科配當表〔明治44年9月～明治45年8月〕 P.13

大學部文學科史學科

(第二學年) 外國地誌 2 矢津

(第三學年) 外國地誌 2 矢津

6) 大正二年度 學科配當表〔大正元年9月～大正2年8月〕 P.12

大學部文學科史學科

(第三學年) 外國地誌 2 矢津

7) 大正三年度 學科配當表〔大正2年9月～大正3年8月〕 P.11

大學部文學科史學及社會學科

(第一學年) 地理 2 矢津

8) 大正四年度 學科配當表〔大正3年9月～大正4年8月〕 P.10

大學部大學科史學及社會學科

(第一學年) 地理 2 矢津

(第二學年) 地理 2 矢津

9) 大正五年度 學科配當表〔大正4年9月～大正5年8月〕 P.9

大學部文學科史學及社會學科

(第二學年) 地理 2 矢津

(第一學年の地理は小田内〔通敏〕)

10) 大正六年度 學科配當表〔大正5年9月～大正6年8月〕 P.9

大學部史學科及社會學科

(第二學年) 地理 2 矢津

11) 大正七年度 學科配當表〔大正6年9月～大正7年8月〕 P.9

(第二學年) 地理 2 矢津

「大正八年度 學科配當表」及びそれ以降のものには矢津の名を見出せなかった。

以上の史料から早稲田大学に於て地理学関係の講義(講師)を受持ったのは少なくとも明治41年9月から大正7年8月までの期間と判明する。ここで注意しなければならない事は、著作目録中⑩14, ⑩14-A, ⑩14-Bのような講義録を出版部より刊行している点である。しかし、講義録を刊行する事が講義担当者である事とは一致しない例が外にあるので、明治36年から40年迄の期間については講師であったとは断定できない。

(B)の期間つまり東京へ上京して以来の海外視察等の行動について「肥後先哲偉蹟後篇」

から抜萃して記す。(この部分は史料不十分の為、裏付調査によって確認することができなかった。)

- 1) 「三十四年北清各地を漫遊して清國の大勢を視察す、同三十五年軍艦高千穂に塔乗して鳥島噴火の状況及び南鳥島を視察す、」(P.753)
- 2) 「〔三十八年〕時恰も日露戦争中に際す乃ち満州の状況を視察せんと欲し、先づ旅順より沙河を経て奉天の戦跡を弔ひ、大山總司令官の好意によりて遂に昌圖鉢巻山の第一線に於て、日露兵の對抗を視る。」(P.753)
- 3) 「大正六年淳宮雍仁親王御教育掛仰付らる、(中略)此の歳青島戦後の状況を視察せんとし山東省旅行の途に上る、則ち濟南より曲阜の孔子廟に詣で遂に泰山に上りて歸朝す。」(P.753)
- 4) 「大正十年三月陸軍省の命により、臺灣の教育状況を視察す、其の途中門司より臺灣に至る海中に數百の空瓶を投し、海流の観測を企つ、蓋し是れ先生が多年の希望の一端を實施したる者といふべし、」(P.753)

矢津は大正11年2月4日永眠した。遺骨は神奈川県横浜市鶴見区に所在する総持寺(曹洞宗)に葬られている。付言するならば、矢津は生前に墓地を総持寺に決めていたのだが、その理由は隣接地に遊園地(花月園)があったためである事を大川英子氏がインタビューの際、語られた。戒名は『無礙光院殿釋昌永居士』である。なお、墓誌は次の通りである。

矢津昌永先生墓誌

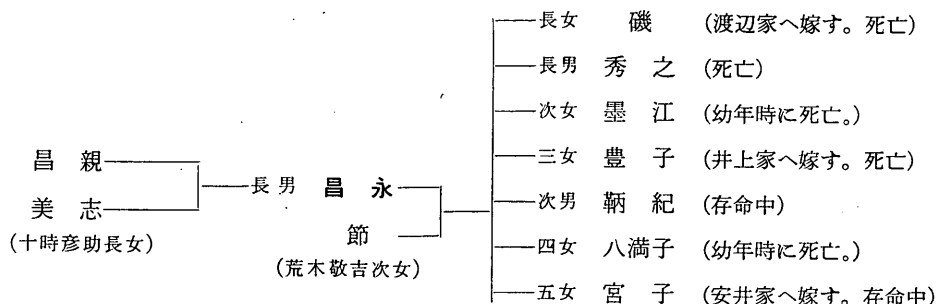
先生諱昌永號城水以地理學教育爲畢生業歷任福井中學校第五高等學校高等師範學校早稻田大學陸軍教授敍從四位勲四等教養學生一萬五千餘人所著日本地文學日本政治地理地理學小品高等地理氣界講話等發行數達二十三萬部大正十一年二月四日歿享年六十一諡無礙光院殿釋昌永居士

昭和三年十月

正三位勲四等 川野健作撰

(C) 資料

(a) 系譜



—六女 英 子 (大川家へ嫁す。存命中)
—三男 大 雄 (死亡)
—四男 永 雄 (死亡)

(昭和53年 7 月 筆者作成)

(b) 写真



矢津昌永の肖像

(及川芳枝氏所蔵)

本稿の終りに臨み、貴重なる文献の貸与、その他御指導を賜わった一橋大学社会科学古典資料センター細谷新治教授に深厚なる謝意を表し、有力な御助言をいただいた慶応義塾大学経済学部高橋潤二郎教授に拝謝する。熊本大学法文学部、東京教育大学、早稲田大学大学史編集所および同所員石山昭次郎氏・松本康正氏には資(史)料の利用等の便宜を図っていただいた。大川英子氏、及川芳枝氏には取材および写真の貸与等について協力を得た。

資料の閲覧利用に種々の便宜を与えられた各図書館(室)、特に早稲田大学図書館、国立国会図書館、一橋大学附属図書館、慶応義塾図書館、淑徳大学図書館、熊本県立図書館に厚く御礼を申し上げたい。

(昭和53年 8 月23日)

第I章 著作目録 (A) 単行本 (c) 世界地理の㊥26-Aの後に次の図書を追加する。

(追補) 韓國地理 完

丸善株式會社 明治三十七年九月廿三日發行 菊判

韓國地理序言〔2頁〕 韓國地理目次一〜四 [本文]一〜二一四

正價金六十錢 <国会図>

(備考) 韓國地理序言

(前略) 本書ハ元來『高等地理』第三卷亞細亞洲ノ部分トシテ發刊スベキモノナリト雖モ現下世人ノ冀望ト時局ノ進行トニ鑑ミ茲ニ別冊トシテ『韓國地理』ト題シ先ヅ發行スルコトトセリ次デ『清國地理』ヲモ亦將ニ續刊セントス

明治三十七年九月遼陽大決戰ノ捷報到ル日

著者識

注記・引用文献

- 1) 源 昌久. “志賀重昂の地理学—書誌学的調査—,” *Library and information Science*, no. 13, 1975, P.183~204.
- 2) 源 昌久. “内村鑑三の地理学—書誌学的調査1—,” 淑徳大学紀要, no. 11, 1977, P.56~78.
- 3) 辻田右左男. 日本近世の地理学. 京都, 柳原書店, 1971. P.299.
- 4) 石田龍次郎. “『地学雑誌』—創刊(明治二十二年)より関東大震災まで 日本の近代地理学の系譜研究,” 一橋大学研究年報社会学研究, no. 11, 1971, P.21.
- 5) Rein, Johann Justus. *Japan: Travels and researches undertaken at the cost of the Prussian government*. Translated from the German. London, Hodder & Stoughton. 1884. 543P. illus., fold. maps.
- 6) 石山 洋. “明治地文学と Sir Archibald Geikie,” 辻村太郎先生古稀記念 地理学論文集, 1961, P.620.
- 7) 源 昌久 (1975), *op. cit.*, P.201.
- 8) 東京文理科大學. 東京文理科大學・東京高等師範學校・第一臨時教員養成所一覽 昭和七年度. 東京, 1932. P.267.
- 9) 石田龍次郎, *op. cit.*, P.65.
- 10) 源 昌久 (1975), *op. cit.*, P.195~196.
- 11) 中川浩一. “明治の地理学史—20・30年代を中心にして—,” 人文地理, vol. 27, no. 5, 1975, P.40.
- 12) 源 昌久 (1975), *op. cit.*, P.199~200.
- 13) 例えば, 南榎庵主人. “地理學に篤學の諸名士傳(二) [矢津昌永],” 地理學研究, vol. 2, no. 2, 1925, P.37~39. が挙げられる。
- 14) 矢津昌永が戸主として記載されている除籍簿による。「師範履」によると, 文久3年7月。
- 15) 習書師とは, 「唐詩類千字文急就篇あるひは民間に切なる字様を誨へ, 稍長じて晋唐諸名家等を學ぶべし。」(熊本縣教育會編. 熊本縣教育史 上巻. 熊本, 1931. P.54) という内容である。
- 16) 寺本広作編. 熊本県史 近代編第一. 熊本, 熊本県, 1961. 818P.
- 17) 熊本縣教育會. 熊本縣教育史 上巻. 熊本, 1931. P.409.

- 18) 熊本大学教育学部編, 熊本師範学校史, 熊本, 1952. P.4.
- 19) *Ibid.*, P.29.
- 20) 矢津が熊本師範学校在学中, 教生として生徒を付属校で指導した。その当時の思い出を赤星典太(元熊本県知事)が次のように述べている。「地理学者となった矢津昌永さんからも習った。大正二年熊本県知事となって赴任した時, 恰度師範学校創立四十年記念式の祝賀式に行ったが, その時矢津さんの祝辞の中に鼻垂小僧で私から教へを受けた赤星君が今は県知事として式場に臨んだ変化の甚だしいところを書いてあった。矢津さんにはよく出来る妹さんがゐてお茶の水の高師に入った有名な婦人だった」(「熊本師範学校史」P.542.)
- 21) 熊本縣教育會, *op. cit.*, P.559.
- 22) 熊本縣教育會, *op. cit.*, P.554.
- 23) 武藤嚴男. 肥後先哲偉蹟後篇. 熊本, 肥後先哲偉蹟後篇刊行會. 1928.
- 24) 重味小学校は熊本県菊池郡重味村に所在し, 「明治十一年熊本縣管内小學校表」(「熊本縣教育史上巻」P.450.)によると, 明治7年に設立され, 生徒数男58名, 女20名の小学校である。
- 25) 櫻井 役. 中學教育史稿. 京都, 臨川書店, 1975. P.207. 本書は昭和17年(1942), 受験研究社増進堂で刊行された図書の復刻。
- 26) *Ibid.*, P.208~210.
- 27) 熊本縣教育會. 熊本縣教育史 中巻. 熊本, 1931. P.359.
- 28) 佐藤伝蔵(明治3年~昭和3年, 1870~1928)は第五高中学校を経て, 東京帝国大学理科大学地質学科を卒業した。地理学の分野では, 山崎直方共著「大日本地誌」全10巻(明治36年~大正4年)を残す。地質学, 鉱物学の分野に於ても業績を上げ, 「大鉱物学」(大正3年~同7年)等がある。
- 29) 東京文理科大學・東京高等師範學校. 創立六十年. 東京, 1931. P.49.
- 30) 中川浩一. “地理学雑誌の系譜(下),” 地理, vol. 21, no. 11, 1976, P.98.
- 31) 東京文理科大學・東京高等師範學校, *op. cit.*, P.59~60.
- 32) 東京文理科大學・東京高等師範學校, *op. cit.*, P.55. なお, 後述する大関久五郎は地理歴史部を明治34年3月卒業した。
- 33) 石田龍次郎. “明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向—山崎直方・小川琢治の昭和期への役割—,” 地理学評論, vol. 44, no. 8, 1971, P.537.
- 34) 東京文理科大學・東京高等師範學校, *op. cit.*, (付録中の)東京高等師範學校教官在職圖表(二), (三).
- 35) 中川浩一(1975), *op. cit.*, P.48.
- 36) 石山昭次郎. “明治後期における早稲田大学の教員および担任課目—明治三十五年九月より明治四十二年八月まで—,” 早稲田大学史記要, no. 9, 1976, P.68.
- 37) 石山昭次郎. “明治末期・大正前期の早稲田大学教員と担任課目—明治四十二年より大正八年まで—,” 早稲田大学史記要, no. 10, 1977, P.78.